新発田市埋蔵文化財調査報告 第39

新発田城跡 発掘調査報告書Ⅵ

（第20地点）

２００９

新発田市教育委員会

例　　言

1．本書は，北関東防衛局が計画した自衛隊新発田駐屯地施設建設工事に伴う，新発田城跡の発掘調査報告である。新発田城跡の範囲内では，地点を変えてたびたび発掘調査を実施しているため，その都度地点番号を付しており，今回の調査地点は「第20地点」にあたる。また，近接する２地点ながら，年度を変えて調査を行ったため，平成19年度に発掘調査を行った東側を「第20-１地点」，平成20年度に発掘調査を行った西側を「第20-２地点」と呼称した。

2．新発田城跡は，新潟県新発田市大手町６丁目４番16ほかに所在している。

3．調査は新発田市教育委員会が主体となって実施した。

4．範囲確認調査を平成18年８月７～11日に実施した。本発掘調査は，東側の第20-１地点を平成19年８月20日～９月26日に，西側の第20-２地点を平成20年５月20日～６月２日に，それぞれ実施した。整理作業は，第20-１地点分の図面･写真の整理と遺物の水洗・注記等の基礎整理を，平成19年の現地調査終了後，冬期間に行い，第20-２地点分の図面･写真の整理と遺物の水洗・注記等の基礎整理を，平成20年の現地調査終了後行った。その後，引き続き本格的な整理作業を行い，平成20年度に報告書を作成した。

5．報告書作成作業は，鶴巻康志・伊藤喜代子の助言･協力のもと，渡邊美穂子が執筆・編集を行った。

6．調査費用のうち，平成18年度の範囲確認調査は文化庁および新潟県の補助金を受けて実施し，平成19・20年度の本発掘調査（現地発掘調査から整理，報告書の刊行にいたるまで）の費用は，開発の原因者である北関東防衛局が全額を負担した。

7．調査の記録および出土品は新発田市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本報告掲載の図面は，地図・地形図は図の「天」を真北とし，その他の図は方位記号の北が磁北を指す。磁北は真北より西偏約7°20′である。遺構図はグリッドラインにあわせて掲載しており，Ｙ軸が磁北に沿う。

2．挿図の縮尺は各図に明記し，スケールを付した。主な縮尺は，遺構図が１／40，陶磁器類は１／３を基本として一部の大型品を1／４，木材・木製品は１／６，古銭等は１／２である。

3．遺構番号は，現地調査時に検出順に付したが，整理作業時に，調査地点ごとに確認面と位置をもとに振り直して報告した。

4．遺物番号は，本書での通し番号であり，挿図・図版とも同一の番号とした。

5．出土遺物には，白色で「遺跡名，遺物番号，グリッド，遺構名･出土層位，出土年月日」を記し，報告書の図版番号を水色で追記した。なお，遺跡名は新発田城を略して「ＳＪ」，土坑は「土」，ピットは「Ｐ」，表面採集は「表サイ」，撹乱は「乱」，排土中は「排」と略記した。

6．本文中の引用・参考文献は，著者名と発行年を括弧書きし，書名・発行機関等は巻末に掲載した。

7．調査に際しては，下記の方々のご協力を得た。（敬称略）

阿部朝衛　甘粕　健　石川日出志　金子拓男　小林昌二　小林正史　坂井秀弥　鈴木秋彦

関　雅之　高橋春栄　橋本博文　増子正三　水澤幸一　北関東防衛局　陸上自衛隊新発田駐屯地

目　次

Ⅰ章　遺跡の位置と背景

1．遺跡の位置と立地 …… 1

2．第20地点と「御作事所」 …… 2

Ⅱ章　調査概要

1．工事計画から本発掘調査に至る経過 …… 3

2．調査体制と調査方法 …… 4

（1）調査体制 …… 4　（2）調査方法 …… 4

3．本発掘調査と整理作業の経過 …… 6

（1）第20－1地点の調査 …… 6　（2）第20－2地点の調査 …… 7

（3）第20地点の本格整理作業 …… 7

Ⅲ章　調査の結果

1．調査区全体の概要と記載方法 …… 8

2．第20－1地点 …… 8

（1）確認面①の遺構と出土遺物 …… 9　（2）確認面②の遺構と出土遺物 …… 14

（3）確認面④の遺構と出土遺物 …… 15　（4）その他の出土遺物 …… 15

3．第20－2地点 …… 19

（1）遺構と出土遺物 …… 19　（2）その他の出土遺物 …… 22

4．加工材の樹種 …… 28

Ⅳ章　まとめ …… 29

引用・参考文献 …… 30　報告書抄録 …… （後付け）

挿図目次

第1図　遺跡の位置 …… 1

第2図　埋蔵文化財包蔵地の範囲と過去の調査地点 …… 2

第3図　工事計画・確認調査とグリッド設定 …… 3

第4図　基本土層 …… 5

第5図　調査区全体図 …… 8

第6図　第20－1地点　確認面①の遺構配置と遺構断面（1）…… 10－11

第7図　第20－1地点　確認面①の遺構断面（2）…… 12

第8図　第20－1地点　確認面①の遺構断面（3）…… 13

第9図　第20－1地点　確認面①の出土遺物 …… 14

第10図　第20－1地点　確認面②の遺構配置と遺構断面（1）…… 16－17

第11図　第20－1地点　確認面②の遺構断面（2）と出土遺物 …… 18

第12図　第20－1地点　確認面④の遺構とⅣ層の遺物 …… 19

第13図　第20－2地点　西側遺構配置と遺構断面 …… 20

第14図　第20－2地点　東側遺構配置と遺構断面 …… 21

第15図　第20－2地点　出土遺物（1）…… 23

第16図　第20－2地点　出土遺物（2）…… 24

第17図　第20地点と御作事所 …… 29

表　目　次

表1　調査体制 …… 4

表2　遺構一覧 …… 25

表3　遺物一覧 …… 26

表4　加工材の樹種 …… 28

写真図版目次

図版1　第20－1地点　調査風景・調査区全景

図版2～5　第20－1地点　遺構（1）～（4）

図版6　第20－2地点　調査風景・遺構

図版7・8　第20地点　出土遺物（1）・（2）

図版9　樹種同定

Ⅰ章　遺跡の位置と背景

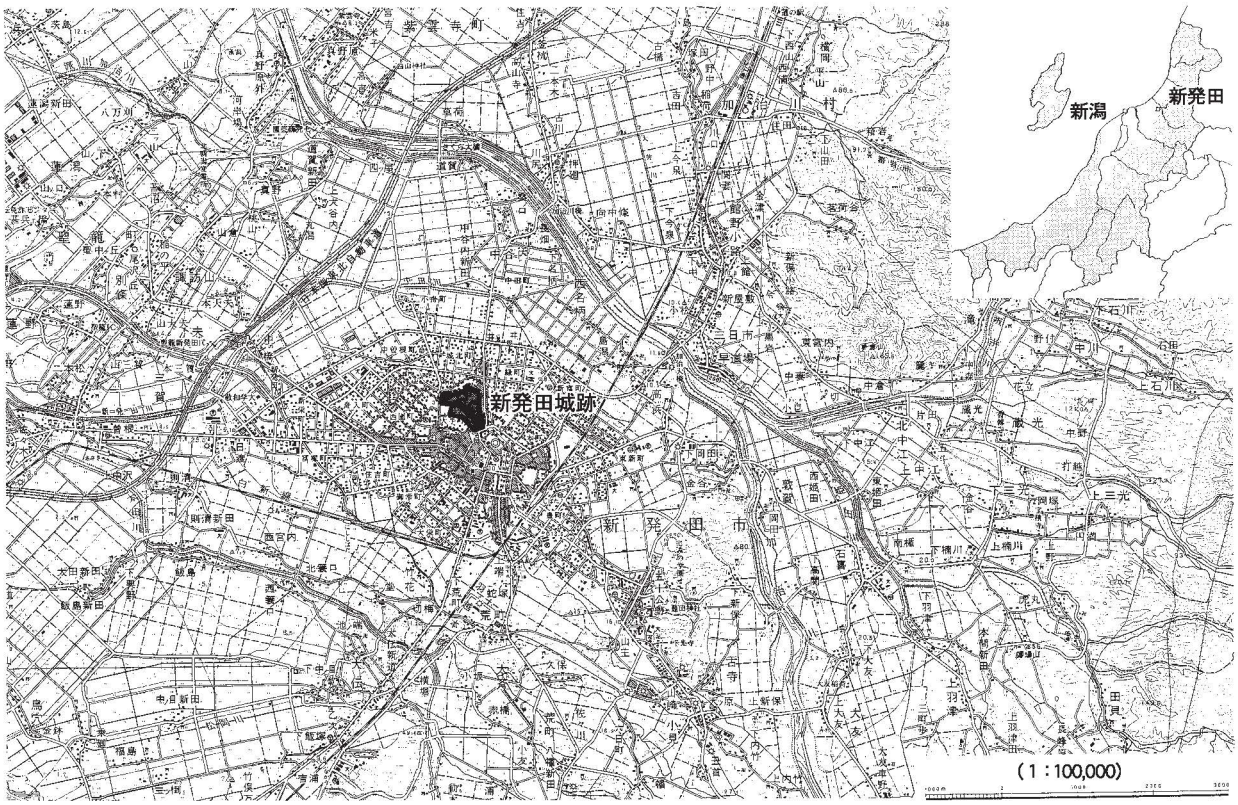
１．遺跡の位置と立地

新発田市を代表する遺跡である新発田城跡は，市街地のほぼ中央に位置しているが（第１図），市街地自体が新発田城の城下町として成立・発展してきたことによる。新発田城跡　第20地点はこのうち，新潟県新発田市大手町６丁目４番地16内に所在し，東経139°19′20秒，北緯37°57′21″（世界測地系）にあたる。

新発田市は新潟平野北部の中核都市で，現在の人口は10万人余りである。市域は，西は日本海に接する藤塚浜から，東は福島県との県境をなす飯豊連峰までの，総面積532.82km²に広がる。全国的に市町村合併の進められた，いわゆる「平成の大合併」に伴い，平成15年７月に北蒲原郡豊浦町，平成17年5月に北蒲原郡紫雲寺町・加治川村との合併で大きく拡大し，現在に至る。

市域の地勢を概略すると，東半を二王子山塊はじめとする飯豊山系が占めており，中央部に加治川が形成した扇状地・沖積地が広がり，西側には海岸線に沿って砂丘列が幾重にも連なる。南東の山間部を抜けて扇状地に流れ出した加治川が，これら東側の山塊・丘陵に端を発した中小河川を合流しながら北西に向かって市域の中央を流れ，砂丘列を突き通して開削された加治川分水を通り，日本海にそそぐ。沖積地では，無数の中小河川が流路にそって自然堤防を，流路の間隙には微高地を形成しながら西流する。近世の干拓以前，これらの河川は砂丘列にぶつかって行き場を失い，大小の潟沼を形成していたが，現在は肥沃な水田地帯となっている。

新発田城は加治川旧扇状地の北西部に位置し，ここを流れる加治川支流新発田川とその支流の流路，および自然堤防を利用して構築された近世城郭である。

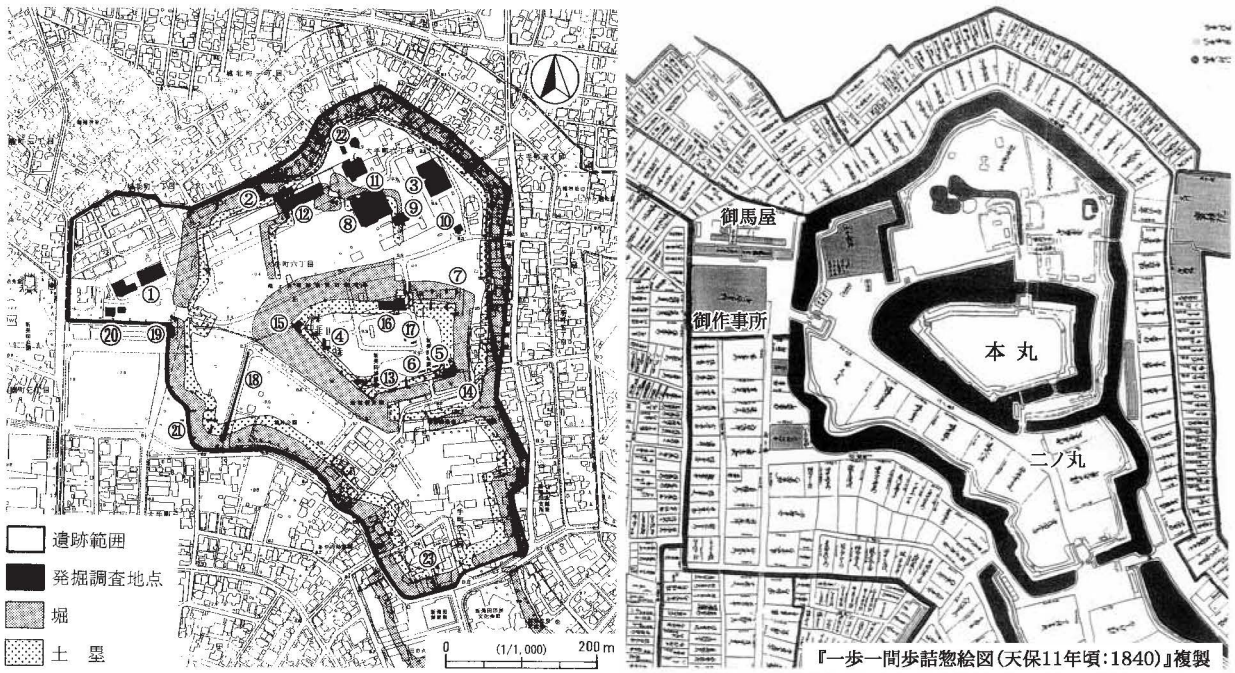


第1図　遺跡の位置

２．第20地点と「御作事所」

新発田城跡は，溝口氏の居城である新発田城の本丸・二ノ丸および，城外に位置する藩の公的施設である「御馬屋」・「御作事所」を含めた範囲を埋蔵文化財包蔵地の範囲として周知化しており，昭和61年の発掘調査を皮切りに，平成21年１月現在，本発掘調査・範囲確認調査を合わせて23地点での発掘調査を行ってきた（第２図）。Ⅰ～Ⅲ区(田中1987)，第７～10地点（鶴巻ほか1997），第11・12地点(鶴巻ほか2001)，第16地点（鶴巻2004），第19地点（伊藤ほか2008)などは，この結果を報告書として刊行しており，新発田城の歴史・概要についてはこれらおよび『新発田市史』（新発田市史編纂委員会1980）・『城下町新発田400年のあゆみ』（鈴木ほか1998）などに詳しい。このため本書では割愛するが，第20地点に関する事項については，簡単にまとめておきたい。

第20地点は城外，外堀西側に位置する西ノ門（または西川門）の外正面，「御作事所」が設置されていた場所の一角にあたる。この地点は新発田城跡Ⅰ区（田中1987)に近接しており，その来歴は同報告に詳しい。この場所は溝口氏入封以降に新発田城の城下町として整備された場所であり，正保元年(1644)，幕府の命により藩で作成した『越後国新発田之城絵図』には「侍町」，同時期の『正保年間御家中絵図』（正保３年,1646)では家臣３名の氏名が記されている。正徳２年(1712)『新発田城之図』でも家臣名が記されており，ある時期までは城外の家臣屋敷地であったことがわかる。その後，「御作事所」がいつ設置されたかを示す直接的な資料はないが，寛政３年(1791)の月番日誌に，藩主のお国入りに先立ち，家老らが城下を見回った際のルートとして，菅原御門を出て片田町を通り，郡方役所，御作事所を過ぎて中曽根・築留に向かっていることが記録されており（高橋2006），このころには城下の西ノ門前付近に御作事所が設置されていたとわかる。正確な位置・範囲等が確認できるのは『一歩一間歩詰惣絵図』（天保11年頃,1840）を待つが，以降，幕末期・明治初年等の各絵図に見られる通り，この地点に御作事所が存在しており，明治元年の末，器械方の設置に伴い御作事方・掛蔵小細工所が廃止されるまで続く。明治6・7年の廃城後，明治18年には，御作事所跡地から現在の新発田城址公園までの広い範囲が，陸軍の営前練兵場として造成されるが，その後，炮庫が建設されるなどして，練兵場からは外れる。終戦後，一時市有地化されるが，昭和28年に警察予備隊(のちの自衛隊)へ譲渡され，現在に至る。



第2図　埋蔵文化財包蔵地の範囲と過去の調査地点

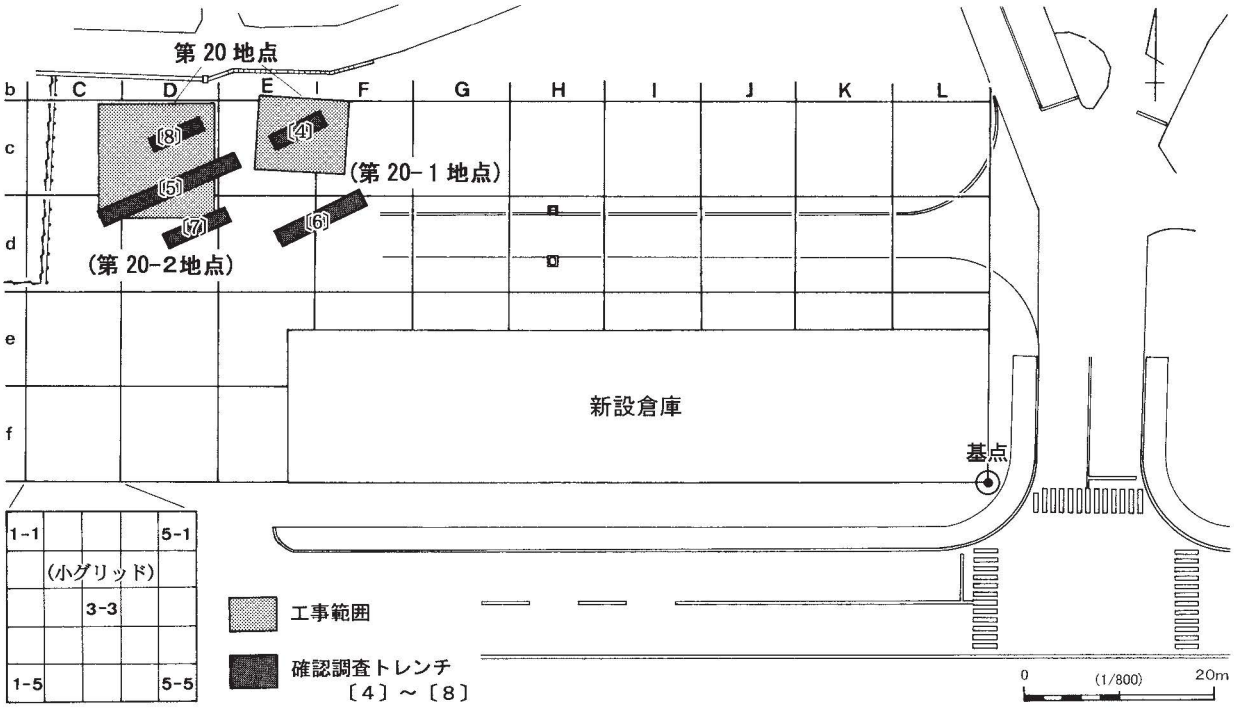
Ⅱ章　調査概要

1．工事計画から本発掘調査に至る経過

平成17年10月，工事の詳細な計画や施工時期は未定ながら，自衛隊駐屯地内の整備の一環として，警衛所裏に施設を建設する計画が浮上，新発田駐屯地業務隊管理科（以下，駐屯地管理科）から口頭で，調査の要否とおおよその調査期間の照会があった。この地点は，19世紀代には新発田藩の公的な施設である「御作事所」になっていたことから，新発田市教育委員会（以下，市教委）は，事前の確認調査と本発掘調査が必要と回答した。

平成18年7月20日，平成19～20年の計画・工事として，同地点での工事内容がほぼ決定，正式に照会があった。このため，確認調査および本発掘調査の必要期間を回答し，調査日時の協議を本格的に開始した。おりしも同年8月1日から，隣接する倉庫建設予定地（新発田城跡　第19地点）での確認調査を予定していたため，新潟県教育庁文化行政課に相談の上，急遽，この調査に続けて新規施設の確認調査も実施することが決定。新発田城跡　第20地点として，8月7～11日に確認調査を実施した。重機と人力により，幅2.2m長さ5.5～13.5mのトレンチ５ヶ所（第３図〔4〕～〔8〕)を掘削。一部は大規模な撹乱を受けているものの，良好な遺構確認面が１～４面遺存しており，建物柱穴跡が多数確認できた。この結果を県文化行政課に報告，本発掘調査が必要との判断を受けた。これを踏まえ，平成18年8月21日，事業の主体者である東京防衛施設局(以下，施設局)と駐屯地管理科・市教委の三者で協議を行い，平成19・20年度の２ヶ年事業として調査時期を協議していくことで合意。

平成18年11月17日，施設局から，第20地点東半の施設建設工事を平成19年度に着工する可能性が出てきたため，本発掘調査を19年度の早い段階に実施できないかとの打診があった。市教委は東半部分（以後，第20-１地点と呼称）の現場調査のみであれば可能だが，西半部分（以後，第20-２地点と呼称）の現場調査および両地点の報告書作成・刊行作業を年度内に終えることは不可能と回答した。この結果，平成19年度に第20-１地点の



第3図　工事計画･確認調査とグリッド設定

本発掘調査を実施し，平成20年度に第20-２地点の本発掘調査と両地点の整理作業および報告書の刊行を行うことで合意。平成19・20年度の２ヶ年にわたって，本発掘調査を実施，発掘調査報告書を作成した。

これらの調査費用のうち，平成18年度実施の範囲確認調査については，国庫および県費の補助を受ており，平成19・20年度の本発掘調査費用（整理作業・報告書刊行を含む）は，開発の原因者である東京防衛局（～平成19年8月）・北関東防衛局（平成19年9月～）が全額を負担した。

２．調査体制と調査方法

（１）調査体制

本発掘調査は新発田市教育委員会が調査主体となって，直営で実施しており，調査体制を表１に示した。

表１　調査体制

平成18年度（範囲確認調査）	平成19年度（第20-1地点 本発掘調査）	平成20年度（第20-2地点本発掘調査，整理作業・報告書印刷）
監　理　大滝　昇　（教育長） 築井　信幸（教育部長） 総　括　土田　雅穂（生涯学習課長） 田中　耕作（生涯学習課 参事） 鶴巻　康志（生涯学習課 埋蔵文化財係長） 調査担当 渡邊美穂子（生涯学習課 主任） 調査員　西澤　正和（生涯学習課 臨時職員） 事務局　六井　浩子（生涯学習課 主事）	監　理　大滝　昇　（教育長） 高澤誠太郎（教育部長） 総　括　土田　雅穂（4・5月生涯学習課長 〃　,6月～教育副部長） 杉本　茂樹（4・5月生涯学習課参事 ,6月～生涯学習課長） 田中　耕作（生涯学習課 参事） 調査担当 鶴巻　康志（生涯学習課 埋蔵文化財係長） 調査員　伊藤喜代子（生涯学習課 臨時職員） 事務局　安達　悦司（生涯学習課 主事）	監　理　大滝　昇　（教育長） 高澤誠太郎（教育部長） 土田　雅穂（教育副部長） 総　括　杉本　茂樹（生涯学習課長） 田中　耕作（生涯学習課 参事） 事務局　鶴巻　康志（生涯学習課 埋蔵文化財係長） 調査担当 渡邊美穂子（生涯学習課 主任） 調査員　伊藤喜代子（生涯学習課 臨時職員）

（２）調査方法

調査範囲とグリッド設定（第３図）　今回の調査では，隣接する２箇所の施設建設予定地(第20-1・２地点)を発掘したが，これらは第19地点(伊藤ほか2008)とも近接しており，同地点調査時に新設倉庫の南辺・西辺を基準のラインとして設定したグリッドを，今回調査でも使用した。グリッドは10m単位を大グリッドとし，北西角を起点に東西にアルファベットの大文字，南北に小文字をつけた。今回の調査区はＣ～Ｆ・ｂ～ｄグリッドにあたる。大グリッド内は２m単位に区切って小グリッドを設定，北西角を起点に１～５の番号を付して表記した。

基本土層（第４図）　表土を含めⅠ～Ⅵ層，遺構確認面４面を検出したが，確認面の遺存状況が地点により異なるため，第４図に(１)～(８)各地点の土層を示した。

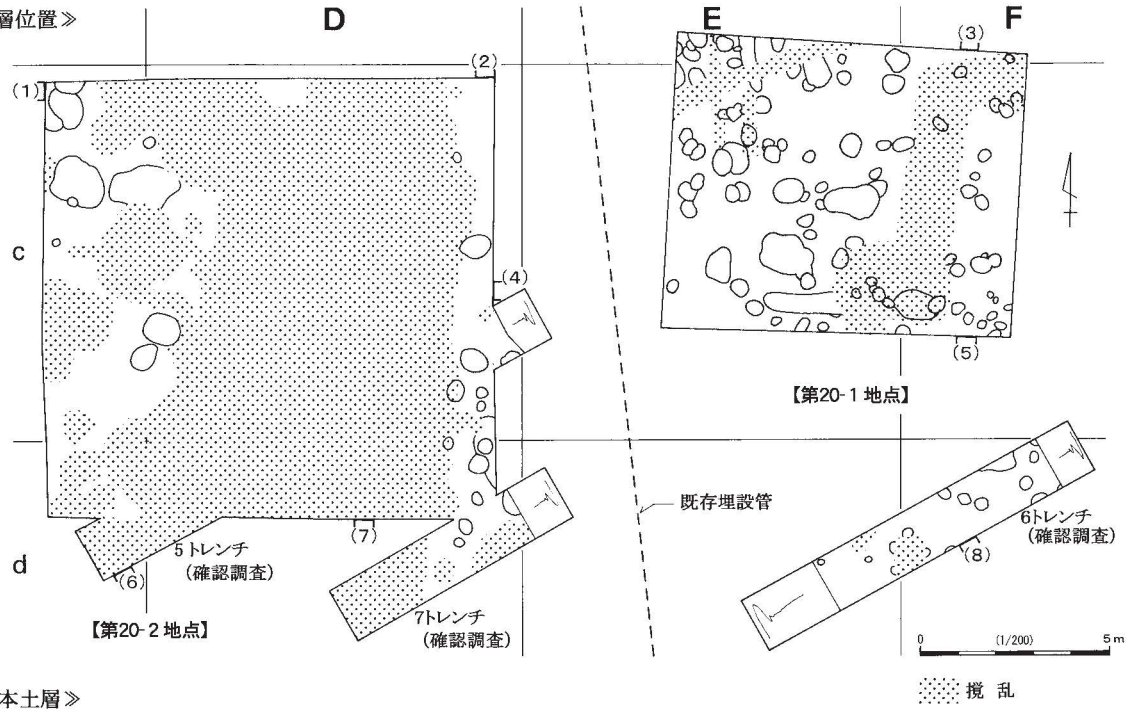
Ⅰ層：表土。面的に広がる近代以降の層を，表土として一括したため，複数の層で構成される。これらの層は調査区全域に広がっており，地表下70～90cmまでがこの表土に当たる。

Ⅱ層（2.5Y3/1黒褐色土）：土色および混入物の少ない点はⅠｃ層と似るが，砂粒が極めて少なく，識別される。上部中位が遺構確認面(確認面①)にあたる。近世の遺物を含む層。20-1地点の全面に広がっており，東側で比較的厚く，ａ・ｂ２層に別れるが，西に向かって薄くなり，一体化する。さらに西では20-2地点の北東部Ｄｃ5-1～5-4までは広がるが，下部のⅢ･Ⅳ層との分離が困難なほどに薄くなる。

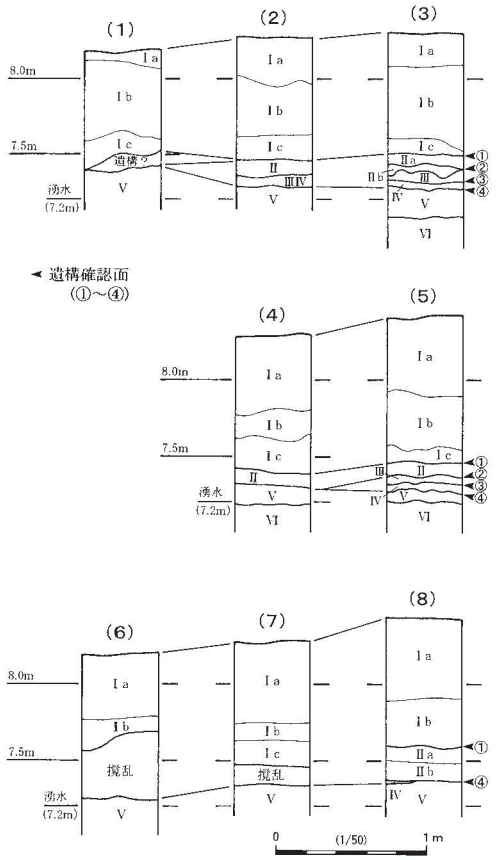
Ⅲ層（2.5Y4/2暗灰黄色粘質土）：粘性強い。鉄分粒多。下部は黒味が強くなり，Ⅳ層の黒褐色土（2.5Y3/1）をマーブル状に含む。上面で遺構確認(確認面②)。ほとんど遺物を含まない層(わずかに近世の遺物が出土)。20-１地点全面に堆積。5～10cmの厚さがあり，南西に向かって薄くなる。西側の20-２地点ではⅣ層にほぼ一体化し，西端では確認できなくなる。

Ⅳ層（10YR3/1黒褐色土）：粘性強く，しまり弱。砂粒・雲母片を多量，砂を少量含む。一部は下層との境で土がマーブル状に混じり合う。上面で遺構確認(確認面③)。ほとんど遺物を含まない層(わずかに古代の遺物を出土)。20-1地点は全面に堆積。5～10cmの厚さがあり，南西に向かって薄くなる。西側の20-2地点ではⅢ層にほぼ一体化し，西端では確認できなくなる。

≪土層位置≫



≪基本土層≫



Ⅰ層　表土。調査区全域に面的に広がる。近～現代の遺物を含む層。
　Ⅰa層（10YR4/6 褐色土）客土の赤土。
　Ⅰb層（埋め立て土。土・砂利や直径3～5cmの炭化物，橙色の風化礫や焼土を含む層が幾重にも堆積。）
　Ⅰc層（2.5Y3/1 黒褐色土）非常にしまりがよく，炭化物粒を微量，砂粒が目立つ。近～現代の遺物が出土。

Ⅱ層（2.5Y3/1 黒褐色土）　近世の遺物を含む層。上面が遺構確認面①。a・b二層に別れるが，堆積の薄い西側では一体化し，下部Ⅲ・Ⅳ層との分離も困難。
　Ⅱa層（7.5Y4/2 灰褐色土）粘性強く，しまり弱い。鉄分粒多。下部は黒味が強くなる。
　Ⅱb層（10YR4/1 褐灰色土）粘性強く，しまり弱い。鉄分粒少。

Ⅲ層（2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土）近世の遺物をわずかに含む層。上面が遺構確認面②。粘性強い。鉄分粒多。下部にはⅣ層の黒褐色土（2.5Y3/1）をマーブル状に含み，黒味が強くなる。西に向かって薄くなり，Ⅳ層と一体化。

Ⅳ層（10YR3/1 黒褐色土）古代・中世の遺物をわずかに含む層。上面が遺構確認面③。粘性強く，しまり弱。砂粒・雲母片を多く含み，少々砂気が強い。一部，下層との境で土層がマーブル状に混ざり合う。西に向かって薄くなり，Ⅲ層と一体化。

Ⅴ層（2.5Y5/2 暗灰黄色シルト）いわゆる地山。上面が遺構確認面④。無遺物層。粘性やややあり，しまり普通。砂粒・鉄分粒少量含む。

Ⅵ層（5Y4/1 灰色細砂）砂を主体とし，横縞状にシルトや粘土を互層に含む。いわゆる地山。無遺物層。

第4図　基本土層

Ⅴ層（2.5Y5/2暗灰黄色シルト）：いわゆる地山。上面が遺構確認面④。無遺物層。粘性ややあり，しまり普通。砂粒・鉄分粒を少量含む。調査区のほぼ全域に堆積するが，20-２地点南西部の，深くまで撹乱が及ぶ部分では，Ⅴ層が失われ，Ⅵ層の砂層が露出する。

Ⅵ層（5Y4/1灰色細砂）：砂を主体とし，横縞状にシルトや粘土を互層に含む。いわゆる地山。無遺物層。調査区全面に広がる。

３．本発掘調査と整理作業の経過

（１）第20-１地点の調査

現地調査　平成19年，6月25日付施東第4273号で施設局長から県教育長に宛て埋蔵文化財発掘の通知がなされる。これに対し，県教育長から，同年7月２日付け教文第390号で，周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知文(調査の指示文)が出される。

平成19年７月31日　施設局長と新発田市長(以下，市長)の間で新発田城跡 第20-１地点の本発掘調査を目的とした委託契約を締結，業務名称を「新発田(19)埋蔵文化財発掘調査業務」とした。

平成19年8月17日付け生学第905号で，市教育長から県教育長宛に埋蔵文化財発掘調査の報告を行い，8月20日～9月26日に現地調査を実施，同年10月9日付け生学第1206号で市教育長から県教育長宛に埋蔵文化財発掘調査の終了を報告した。なお，同年9月1日，防衛施設庁が防衛省に統合されたため，事業者である「東京防衛施設局」が「北関東防衛局」に改称となる。

調査日誌抄（平成19年）

8月20～23日プレハブ・トイレ等の設備を搬入し，重機により表土を除去。並行して杭打ち・グリッドを設定。

8月24～9月11日　灰褐色土(Ⅱ層)の上面(確認面①)を精査，遺構確認を行なう。ピットを多数検出，溝・土坑も確認した。これらを掘削し，記録を行うが，たびたびの降雨により調査区内に雨水が溜まり，排水作業に手間取る。最後に全体を精査，確認面①の完掘写真の撮影，完掘図の作成・レベリングを行い，確認面①の調査を終了する。

9月13～18日　灰褐色土(Ⅱ層)を掘り下げ，暗灰黄色土(Ⅲ層)の上面(確認面②)を精査するが遺構はほとんど無く，上層の掘り残しが若干見られる程度である。これらを掘り上げ，完掘写真を撮影。完掘平面図の作成・レベリングを行い，確認面②の調査を終了。すぐに黒褐色土(Ⅳ層)の上面（確認面③）の精査と遺構確認を行なうが遺構はなく，大型撹乱溝の底面で検出したピットの調査を行う。最後に精査を行い，完掘写真を撮影。完掘平面のレベリングを行い，確認面③の調査を終了する。引き続きⅣ層を掘り下げ，暗灰黄色シルト(Ⅴ層)の上面(確認面④)を出し，精査して遺構確認を行う。溝やピットが複数ある。また，このレベルまで下げると，じわじわ湧水。

9月19～26日　確認面④で検出した遺構を半截，記録を行う。礎盤石・根固め石を持つピットが見つかるが，いずれも④面から掘り込まれているようには見えない。最後に，遺構の見落としがないかを確認するため，最終の確認面から下へ重機で約５cmずつ，－30cmまで掘り下げるが，新たな遺構の検出は無く，調査を終了とする。並行して器材の搬出を行い，あわせて，平成20年度実施予定の第20-2地点の調査に向け，グリッド杭とレベル基準点の移動を行い，重機により調査区を埋め戻し，平成19年度分の現地調査を終了する。

基礎整理作業　平成19年11月～平成20年3月　平成19年度の現地調査で作成・撮影した図面・写真等の整理を行い，遺構カードを作成。本遺跡は特に，４枚の遺構確認面とピット多数が重複するため，遺構と帰属層の関係性の把握に手間取る。並行して出土遺物の水洗・注記を行う。

平成20年3月5日，調査区に撹乱が多く，調査費が若干軽減したため，北関東防衛局長と市長の間で変更契約

を締結，同3月19日付け生学第2072号で市長から北関東防衛局長宛に「新発田(19)埋蔵文化財発掘調査業務」の完了報告書を提出し，平成19年度の委託業務を終了した。

（2）第20-2地点の調査

現地調査　平成20年1月21日付関防第193号で北関東防衛局長から県教育長に宛て埋蔵文化財発掘の通知がなされ，これに対し，県教育長から，同年2月5日付け教文第1223号で，周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知文(調査の指示文)が出される。

平成20年3月14日　北関東防衛局長と新発田市長(以下，市長)の間で新発田第20-2地点の本発掘調査を目的とした委託契約を締結，業務名称を「新発田(19)埋蔵文化財発掘調査業務（その2）」とした。

平成20年4月22日付け生学第169号で，県教育長宛に埋蔵文化財発掘調査の報告を行い，5月20日～6月2日に現地調査を実施，同年6月20日付け生学第545号で県教育長宛に埋蔵文化財発掘調査の終了を報告した。

調査日誌抄（平成20年）

5月20～21日　プレハブ・トイレ等の設備を搬入し，重機により表土を除去する。ほぼ全面に大小さまざまな撹乱が及んでおり，東辺北側のわずかな範囲を除いて，Ⅱ～Ⅳ層が残存しない。このため，Ⅴ層を確認した段階で重機による掘削を終了する。その後，杭を打ち，グリッド設定。

5月22～28日　小型のクローラーを搬入し，人力による掘削を開始。調査区全面を精査し，遺構の検出に努めるが，撹乱が広範囲に及んでおり，遺構の認定に苦慮する。まず，比較的高いレベルでⅤ層の確認できた西半で，Ⅴ層上面（前年調査での確認面④に当たる）の遺構確認を行い，掘削。遺構・撹乱とも，近世の陶磁器類を出土し，撹乱からは，近代以降の製品も出土。その後，撹乱底での遺構の検出を目指して，撹乱についても土層を確認しつつ掘り下げる。しかし，標高7.2m以下になると湧水が著しく，排水が不可能となるため直前で掘り止めた。また，途中の降雨により調査区内に雨水が溜まり，排水作業に手間取る。

5月28日～6月2日　東半の大規模な撹乱の掘削に着手。西半同様，撹乱下での遺構の検出に努めるがほとんど確認できない。南東隅の一角のみ，比較的高いレベルでⅤ層が遺存していたため遺構も残存。遺構・撹乱とも，近世の陶磁器類が出土し，撹乱からは，近代以降の製品も出土。ただし，15号土坑のみ，古代の土師器類がまとまって出土。これらを掘り下げ，図・写真等の記録を作成して発掘終了。

6月3～10日　降雨および湧水により，調査区内に溜まった水を抜き，重機で表土を埋め戻し，原状に復す。プレハブ・トイレ等の設備を搬出し，現地作業を終了する。

基礎整理作業　平成20年6月　平成20年度の現地調査で作成・撮影した図面・写真等の整理を行い，遺構カードを作成。遺構確認面は1面だが，多数の撹乱が絡み合っており，遺構の関係性の把握に手間取る。並行して出土遺物の水洗・注記を行う。

（3）第20地点の本格整理作業

平成20年7～9月　出土遺物の分類・接合を行い，報告書への掲載遺物を決定。実測図・拓本作成作業に着手し，並行して観察・計測を行う。また，第20-1・2地点合わせて多数あるピットの相関関係の確認・検討などを実施。対応関係の確認に苦慮する。また，外部専門機関に委託して，出土木材の樹種同定分析を実施。同年12月から報告書の図版作成を本格的に開始。個々の遺構・遺物図面のトレース作業を行う。

平成21年1・2月，掲載遺物の写真撮影を行い，並行して報告書版下の貼り込み作業等を実施。報告書の原稿を執筆し，調査結果を報告書として刊行する。

なお，平成20年度調査区は全面に撹乱が及んでおり，現地調査費用が半減したため，平成21年に入り，北関東防衛局長と市長の間で費用負担の変更契約を締結，同年3月の事業完了に至った。

Ⅲ章　調査の結果

１．調査区全体の概要と記載方法

第20地点は５ｍの未調査区を挟んで，東西２箇所の調査を行い（第５図），調査した順番に応じて東側を第20-１地点，西側を第20-１地点と呼称した。このうち，20-１地点では72㎡の狭い範囲ながら複数の遺構確認面があり，近世に構築された掘立柱建物１棟・ピット列２列・溝３条・土坑２基・ピット69基を検出した。一方，第20-2地点では144㎡の範囲を調査したが，大小さまざまな撹乱を受けており，遺構確認面は１面，遺構は土坑３基・ピット18基しか検出できなかった。表土および撹乱から近世を中心とする遺物が出土し，遺構も大半はこの時期に帰属すると考えているが，土坑１基のみ，古代の可能性を持つ。

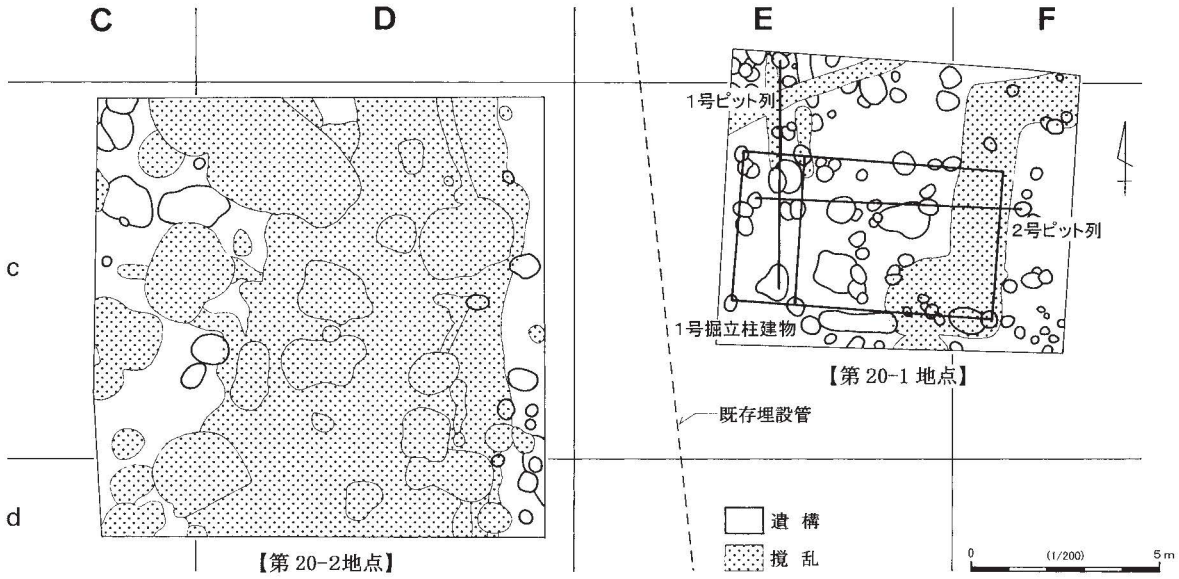
両調査区はわずか５ｍしか隔たっていないが，あるいは第20-２地点が，大半を撹乱されているためなのか，遺構の様相は全く異なっている。ともに複数のピットを検出していながら，両調査区にかけて広がる建物配置等を確認することが出来なかった。このため，以下では，調査区・確認面ごとに遺構を掲載・記述する。掲載方法等，特記を要すると考えられるものについては各項の冒頭に明記し，遺構・遺物とも，概要および特徴的な事象を中心に記述を行った。その他，個別の観察事項については後掲の一覧表(表２・３)にまとめた。

遺物は出土量が少ないため，可能な限り図化を試みたが，小片で図化に堪えないものが多い。なお，出土遺物の分類・時期等は，以下の文献を参考とした。

奈良・平安時代の須恵器・土師器（春日ほか2004），中近世瀬戸・美濃（藤澤1993,1997,2007），越前焼（楢崎1986），珠洲焼（吉岡1994），肥前陶磁器類（九州近世陶磁学会事務局2000），近世貿易陶磁（大橋1987,森1995），近世陶磁器類一般(水本1998),堺擂鉢（嶋谷1996），銭貨（永井1996)。

２．第20-1地点

【遺構確認面】　遺構確認面は，当初４面（確認面①～④）の存在を想定して調査を実施したが，結果的には，近世の遺構が確認された上２面（①②）を主体とし，③面での検出遺構はなく，最下層（④）の遺構もピット1基のみであった。主体を占める確認面①･②は，確認面の層の包含遺物から近世と推定できる。遺構は確認面ごと



第5図　調査区全体図

に掲載した。撹乱や他の遺構の底面で検出した，帰属面が特定できない遺構は上層に含めて掲載したが，これらの遺構の大半は掘削が確認面②～④より下まで及んでいるため，これらの面に帰属する可能性も残す。なお，組み合うピット等を推定したものは，これと同じ確認面の図に掲載した。

【建物等の認定】　検出した遺構の大半はピットであり，単体で機能したものではなく，建物や塀･柵といった構築物の一部と考えられる。これらの組み合わせについて，深さ・太さ・礎盤石や根固め石の敷設といった構造等の類似性，柱間寸法等をもとに検討し，掘立柱建物１棟・ピット列２列を検出した。一部柱穴跡のない部分もあるが，上層からの撹乱により失われた可能性を考えている。

なお，過去の「御作事所」発掘調査（田中1987）で検出した長屋建物において，基礎の栗石状況から見て明らかに同一建物として組み合うピットでも，間隔が一部不均一であったり，柱穴の標高差が20cm前後もあるなど，必ずしも規則的ではない部分が存在することが確認された。このため，今回調査で検出したピットについても，柱間間隔や深度など，複数の要素のうち一部でも共通するものは同一の構築物とした。しかし，この他，礎盤石や根固め石等を持つ，明らかに建築物の痕跡と見えるピットが複数検出できたにもかかわらず，これらの多くのピットは組み合う先が確認できなかった。ただし，今回調査の狭い調査区内では確認できなかっただけで，調査区外に展開する可能性を残す。

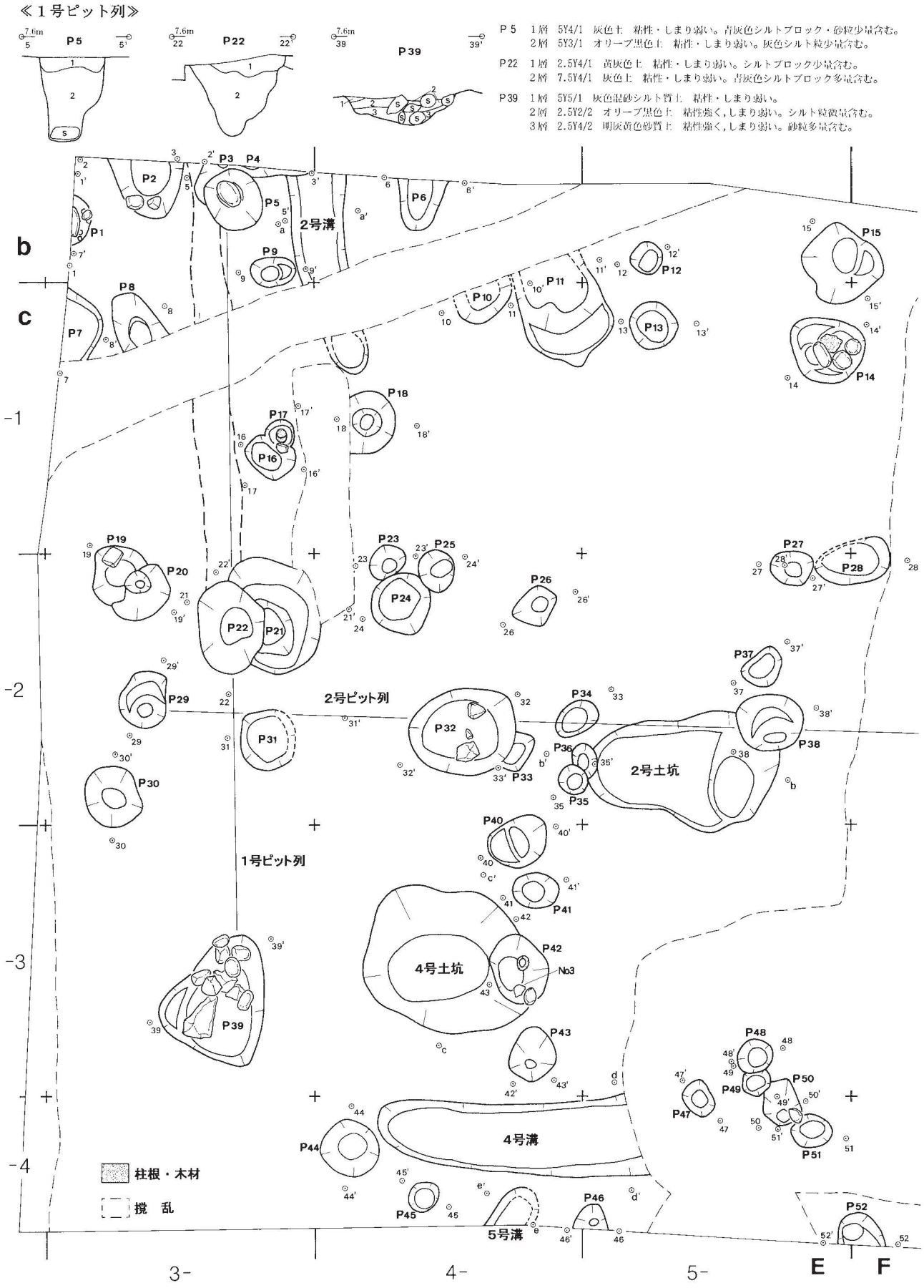
（１）確認面①の遺構と出土遺物

確認面①は表土直下，基本土層Ⅱ層の上面にあたり，Ⅱ層の最新遺物が近世，確認面①検出の遺構に含まれる最新遺物が19世紀代（～幕末）の遺物であることから，この面で確認した遺構をこの時期に位置づけた。ピット列２列・溝３条・土坑２基・ピット60基を検出した（第６～８図）。このうち，調査区南西部(Ｅｃ3-1～Ec5-4以西)の一角は，深いレベルまで撹乱が及んでおり，Ⅰ層直下がⅢ～Ⅴ層であった。この範囲で検出した遺構も確認面①の遺構に含めているが，大半の遺構は深さが確認面②～④より下まで及んでおり，これらの面に帰属する可能性もある。

ピット列　２列を検出した(第６図，図版２)。このうち，１号ピット列（Ｐ５・22・39）は柱間間隔が3.1mと均等であり，底面標高が6.9m前後にまとまることから，組み合うピット列と判断した。しかし，ピットの形状に統一性はなく，Ｐ5は底部に礎盤石，Ｐ39は柱の入る隙を残して，周囲に栗石が込められた状態であった。ピット列の軸は西偏1度とほぼ南北方向に伸びており，調査区の西端に位置するため，南北･西に広がる建物の一部であろうか。Ｐ39から，瀬戸・美濃の折縁皿1点（大窯第４段階：16世紀末～17世紀初頭）が出土（第９図１）しており，この他，Ｐ22からは中国製染付碗２点（17世紀），産地不明の近世陶器２点（19世紀代～幕末）が出土。Ｐ５からは鉄釘類が出土したが，さびによる劣化が著しく，原形をとどめない。２号ピット列（Ｐ29・32・38・60）は柱間間隔が2.4mと均等であり，底面標高が7.1m前後にまとまることから，組み合うピット列と判断した。ピットの形状は比較的一致するが，Ｐ32のみ大型であり，土層中位から割石数点が出土した。ピット列の軸は西偏88度とほぼ東西方向に伸びるが，南北方向への広がりは確認できない。遺物はＰ60から肥前陶器の丸皿1片（肥前Ⅰ-２期：17世紀初頭）が出土しているのみである（第９図２）。

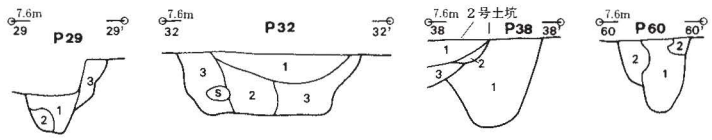
溝　３条を検出した(第６図，図版２)。いずれも幅50cm前後，深さ10cm以下と，細く浅い。このうち，２号溝は南北，４号溝は東西方向に伸びる。

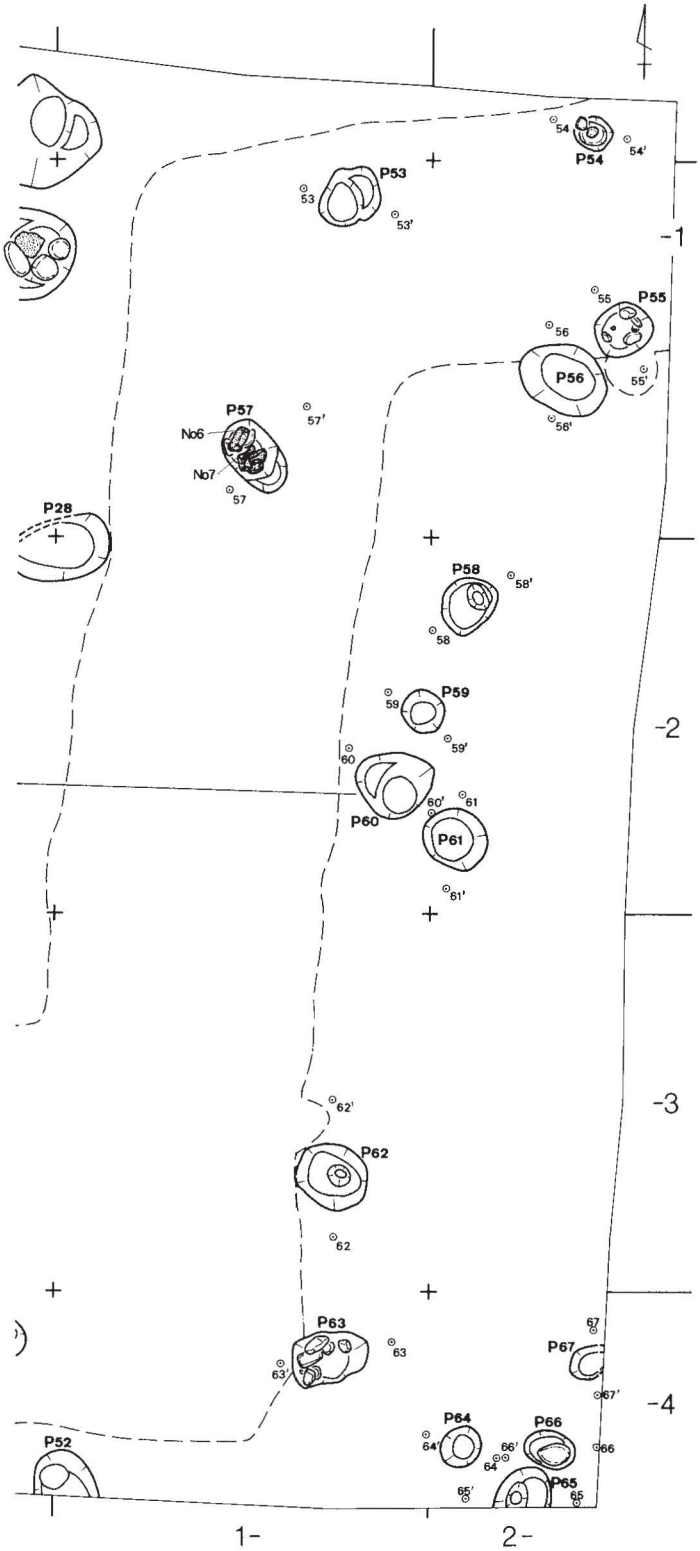
土　坑　２基を検出した(第６図，図版２)。２号土坑は底部に細かい凹凸があり，一部ピット状に深い。近世染付１点，産地不明の近世陶器碗類３点が出土した。４号土坑は断面形が椀型で，産地不明の近世陶器碗類１点，黒瓦片1点，古代の土師器片1点が出土した。



第6図　第20-1地点　確認面①の遺構配置と遺構断面(1)

≪２号ピット列≫





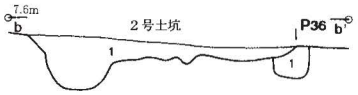
P29
1層　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性強く,しまり弱い。シルト粒微量含む。
2層　5Y4/1　灰色土　粘性・しまり強い。鉄分微量含む。
3層　5Y5/1　灰色シルト質土　粘性・しまり弱い。

P32
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性無し,しまり良い。φ５㎜～２㎝の炭化物粒多量含む。
2層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性あり,しまり良い。φ３～５㎜のシルト粒含む。
3層　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　粘性少しあり,しまり良い。φ２～３㎝のシルトブロック多量含む。

P38
1層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性強く,しまり弱い。シルト粒少量含む。

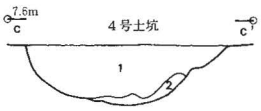
２号土坑
1層　2.5Y4/1　灰色土　粘性弱く,しまり強い。シルト粒多量,砂粒少量,炭化物粒・橙色土粒微量含む。
2層　2.5Y7/3　浅黄色シルトブロック
3層　2.5Y4/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。シルト粒少量含む。

P60
1層　10YR4/1　褐灰色土　粘性強く,しまり弱い。シルト粒をしみ状に含む。
2層　2.5Y5/1　黄灰色土　粘性強く,しまり弱い。灰黄色シルトブロック多量に含む。



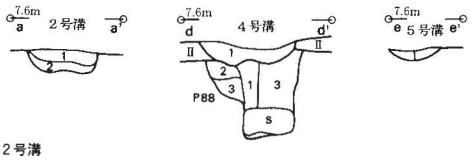
P36
1層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　砂粒微量含む。

２号土坑
1層　2.5Y4/1　灰色土　粘性弱く,しまり強い。シルト粒多量,砂粒少量,炭化物粒・橙色土粒微量含む。



４号土坑
1層　2.5Y5/1　黄灰色砂質土　粘性弱く,しまり強い。砂粒多量含む。
2層　5Y4/2　灰オリーブ色土　粘性・しまり弱い。黒褐色土ブロック少量含む。

≪溝≫

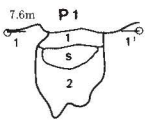


２号溝
1層　5Y4/1　灰色土　粘性・しまり弱い。砂粒多量,シルト粒微量含む。
2層　5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性・しまり弱い。シルト粒微量含む。

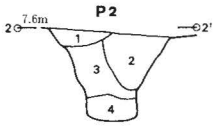
４号溝
1層　5Y4/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。細砂粒少量含む。

５号溝
1層　2.5Y5/1　黄灰色土　粘性・しまり普通。細砂粒多量含む。

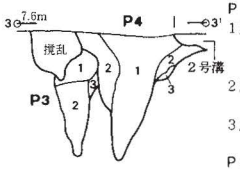
≪ピット≫



P１
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性・しまり弱い。灰黄色シルト小ブロック多量含む。
2層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性・しまり弱い。灰黄色シルト小ブロック多量含む。



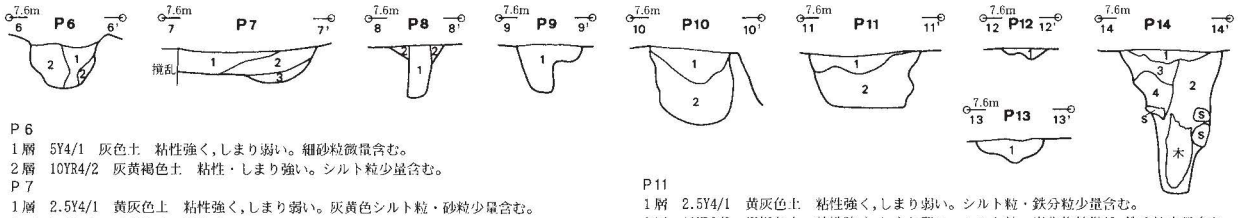
P２
1層　2.5Y5/2　暗灰黄色土　粘性・しまり弱い。炭化物粒微量,シルトブロック多量含む。
2層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性・しまり強い。シルトブロック少量,細砂粒微量含む。
3層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く,しまり弱い。シルトブロック多量,鉄分微量含む。
4層　5Y4/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。シルトブロック少量含む。



P３
1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性強く,しまり弱い。シルトブロック・鉄分粒多量含む。
2層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性極強,しまり弱い。シルト粒少量含む。
3層　2.5Y5/3　黄褐色土　粘性強く,しまり弱い。鉄分少量含む。

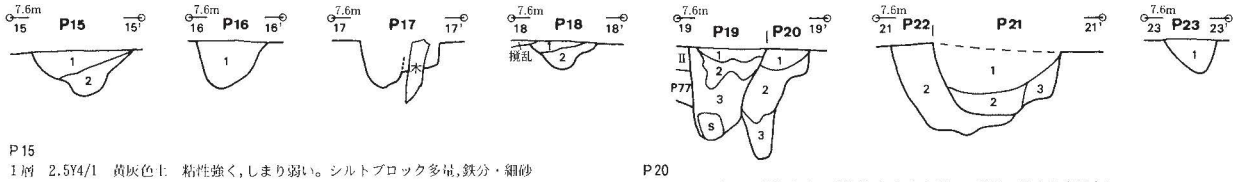
P４
1層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性普通,しまり弱い。シルト小ブロック多量,鉄分粒・砂粒少量含む。
2層　10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性強,しまり弱。シルトブロック多量,砂粒少量含む。
3層　2.5Y6/1　黄灰色シルトブロック　粘性弱,しまり強。

0　(1/40)　1m



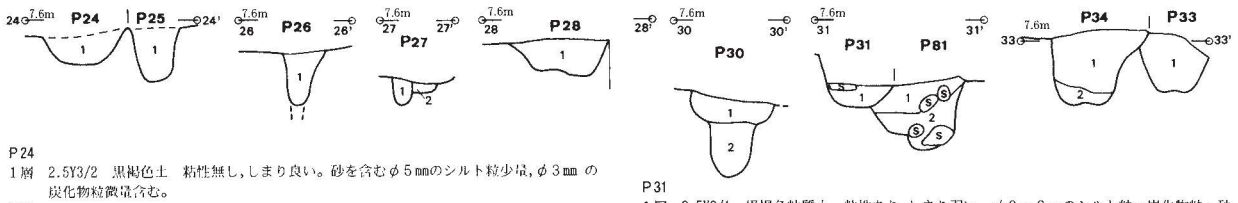
P 6
1層　5Y4/1　灰色土　粘性強く，しまり弱い。細砂粒微量含む。
2層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性・しまり強い。シルト粒少量含む。
P 7
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。灰黄色シルト粒・砂粒少量含む。
2層　2.5Y4/2　暗黄色土　粘性強く，しまり弱い。灰黄色シルトブロック多量に含む。
3層　2.5Y4/1　黄灰色混砂シルト質土　粘性強く，しまり弱い。シルトブロックをまだらに含む。
P 8
1層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性・しまり弱い。シルトブロック多量，細砂粒少量含む。
2層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性・しまり弱い。シルトブロック多量含む。
P 9
1層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性・しまり強い。砂粒微量含む。
P10
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性・しまり弱い。シルト粒・砂粒微量含む。
2層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性強，しまり弱。灰黄色シルト粒多量含む。

P11
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒・鉄分粒少量含む。
2層　10YR3/2　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒・炭化物粒微量，鉄分粒少量含む。
P12
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。青灰色シルト粒・炭化物粒微量含む。
P13
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。
P14
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。シルトブロック多量，砂粒微量含む。
2層　5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性強く，しまり弱い。細砂粒微量含む。
3層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性・しまり弱い。細砂粒微量含む。
4層　7.5Y5/1　褐灰色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒少量，鉄分多量含む。



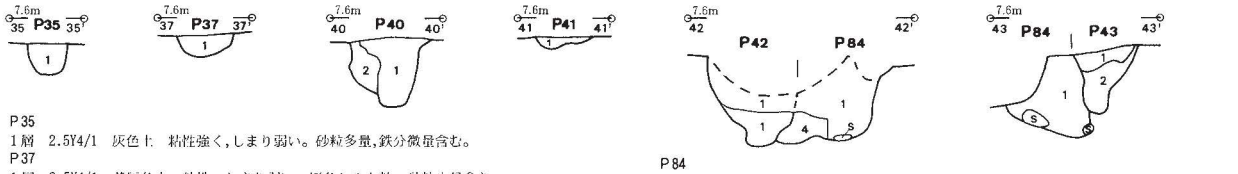
P15
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。シルトブロック多量，鉄分・細砂粒微量含む。
2層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。シルトブロック多量含む。
P16
1層　2.5Y4/1　灰色土　粘性・しまり弱い。鉄分粒・灰黄色シルト粒少量，炭化物粒微量含む。
P17
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性・しまり強い。
P18
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性・しまり弱い。シルト粒・砂粒微量含む。
2層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒微量含む。
P19
1層　10YR4/1　褐灰色土　粘性強く，しまり弱い。砂粒微量，鉄分粒少量含む。
2層　2.5Y5/1　黄灰色土　粘性無く，しまり弱い。細砂粒・鉄分粒少量含む。
3層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性・しまり弱い。鉄分粒少量含む。

P20
1層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性強く，しまり弱い。砂粒・鉄分粒少量含む。
2層　10YR4/1　褐灰色土　粘性強く，しまり弱い。鉄分粒少量含む。
3層　10YR3/1　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。
P21
1層　5Y4/1　灰色土　粘性・しまり弱い。青灰色シルトブロック多量，細砂粒を少量含む。
2層　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性強く，しまり弱い。青灰色シルトブロック少量，炭化物粒微量含む。
3層　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒少量，炭化物粒微量含む。
P22
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性・しまり弱い。シルトブロック少量含む。
2層　7.5Y4/1　灰色土　粘性・しまり弱い。青灰色シルトブロック多量含む。
P23
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性・しまり弱い。シルト粒・砂粒微量含む。



P24
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性無し，しまり良い。砂を含むφ5mmのシルト粒少量，φ3mm の炭化物粒微量含む。
P25
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性無し，しまり良い。砂を含むφ5mmのシルト粒少量，φ3mm の炭化物粒微量含む。
P26
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　下部ほど粘性強，しまり良い。砂を含む。
P27
1層　5Y5/1　オリーブ黒色土　粘性あり，しまりゆるい。柱痕か?
2層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性少しあり。φ1cmのシルト粒と砂少量含む。
P28
1層　5Y3/1　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒・鉄分少量含む。
P30
1層　5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性強く，しまり弱い。シルトブロック少量含む。
2層　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性強く，しまり弱い。シルトブロック多量含む。

P31
1層　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　粘性あり，しまり弱い。φ2～3mmのシルト粒・炭化物粒・砂粒少量含む。
P81
1層　10YR3/2　黒褐色土　粘性ややあり，しまり良い。φ3～5mm 炭化物粒少量，φ5mm のシルト粒多量含む。
2層　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　粘性強く，しまり普通。φ5cmのシルトブロックをまだらに含む。
P33
1層　10YR2/2　黒褐色土　粘性普通，しまり良い。φ5mm～1cm シルト粒多量，φ5mmの炭化物粒微量含む。
P34
1層　10YR3/2　黒褐色土　粘性無し，しまり良い。φ3～5mmのシルト粒とφ2～3mmの小礫を多量に含む。
2層　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　粘性あり，しまり普通。



P35
1層　2.5Y4/1　灰色土　粘性強く，しまり弱い。砂粒多量，鉄分微量含む。
P37
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性・しまり弱い。灰色シルト粒・砂粒少量含む。
P40
1層　2.5Y4/1　灰色土　粘性強く，しまり弱い。青灰色シルトブロック多量含む。
2層　2.5Y5/2　暗灰黄色土　粘性強く，しまり弱い。シルトブロック多量，細砂粒微量含む。
P41
1層　10YR4/2　にぶい黄褐色土　粘性・しまり強い。シルト粒少量含む。
P42
1層　2.5Y5/1　黄灰色シルト質土　粘性・しまり弱い。灰黄色シルトと暗灰黄色土が混じる。

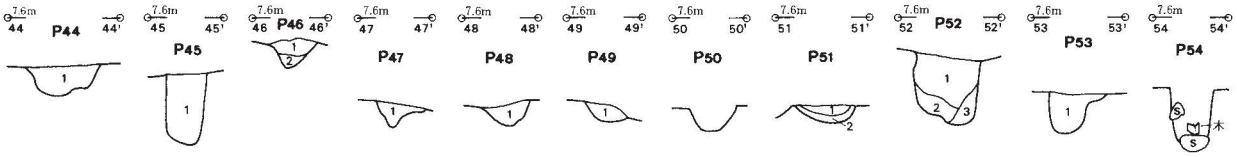
P84
1層　5Y4/1　灰色土　粘性・しまり弱い。砂粒・炭化物粒多量，シルト粒少量含む。
2層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性強く，しまり弱い。砂粒・シルト粒多量含む。
3層　5Y5/1　灰色土　粘性強く，しまり弱い。青灰シルト小ブロック・砂粒少量含む。
4層　5Y4/1　灰色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒・細砂粒少量含む。
P43
1層　2.5Y5/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。浅黄色シルトブロック多量含む。
2層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性強く，しまり弱い。

0　(1/40)　1m

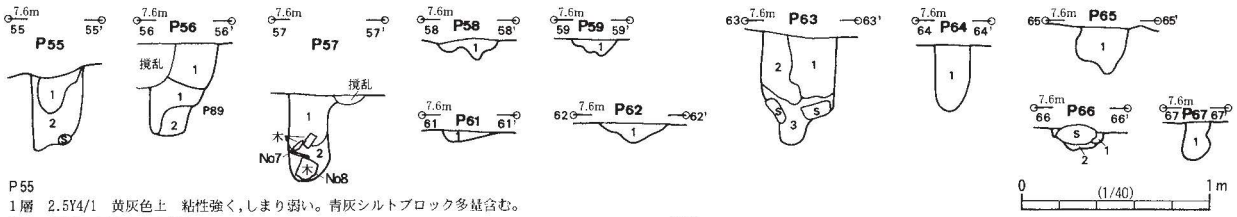
第7図　第20-1地点　確認面①の遺構断面(2)

ピット　ピット列のピットを除き，60基を検出した(第６～８図，図版２～４)。このうち，Ｐ1は埋土上部に上面の平らな礎盤石を据え，周囲に小石・黒瓦片数点を込めた状態であった。また，鉄釘類が数点出土しているが，いずれも錆びによる劣化が著しく，原形をとどめない。Ｐ54は底に置かれた礎盤石の中央に，直径７cmの細い木材が据えられ，上部壁際に栗石１点が配されていた。Ｐ66も底に礎盤石を据えられていた。Ｐ55・63は礎盤石を持たないものの，柱の入る隙を残して，周囲に栗石が込められた状態であり，Ｐ２・19・42・50は底部壁際に栗石や割石１～２点が配されていた。このうち，Ｐ42は栗石脇から越前焼擂鉢1点（越前Ｖ期後半：16世紀後半，第９図３）と，肥前陶器を含む近世陶器５点が出土。Ｐ14は中心に加工木材(第９図４)が据わり，周囲に栗石を込めた状態で出土した。全面を面取りした丸木材で，一見，柱材と見えるが，木材下端側面を全周する形で溝が切られており，単純に柱材とは言い難い。別の用途に用いられていた木材を建築部材に転用したとも考えられるが，柱に転用するのであれば，この溝加工部分を切除するのが強度確保のためにも妥当と考えられ，その性格は不明。一方，Ｐ17からは，杭(第９図５)が打ち込まれた状態で出土，底に向かって非常に細くなるＰ３・４・26も，打ち込み杭の痕跡の可能性を持つ。また，Ｐ57はピット下部北半に栗石が込められており，下部南半および中位から木材片がまとまって出土した。図化可能な木材３点を掲載(第９図６～８)したが，切断された杭の先端部分(６)・桶類の底板破片(７)・ホゾ穴を持つ建築部材(８)と多様である。加えて，ピット内の南北で充填される素材が異なる点から，栗石を持つ掘立柱の柱根を引き抜いた後，不要木材片を廃棄したと考えられる。

その他，いくつかのピットから，図化には堪えない小片ながら遺物が出土した。Ｐ６：肥前陶器皿（肥前Ｉ～Ⅱ期：17ｃ初頭）1点，Ｐ18：古代の土師器１点，Ｐ31：黒平瓦１点，Ｐ36：中世越前焼１点，Ｐ67：陶器灰釉端反碗(19世紀～幕末)1点。

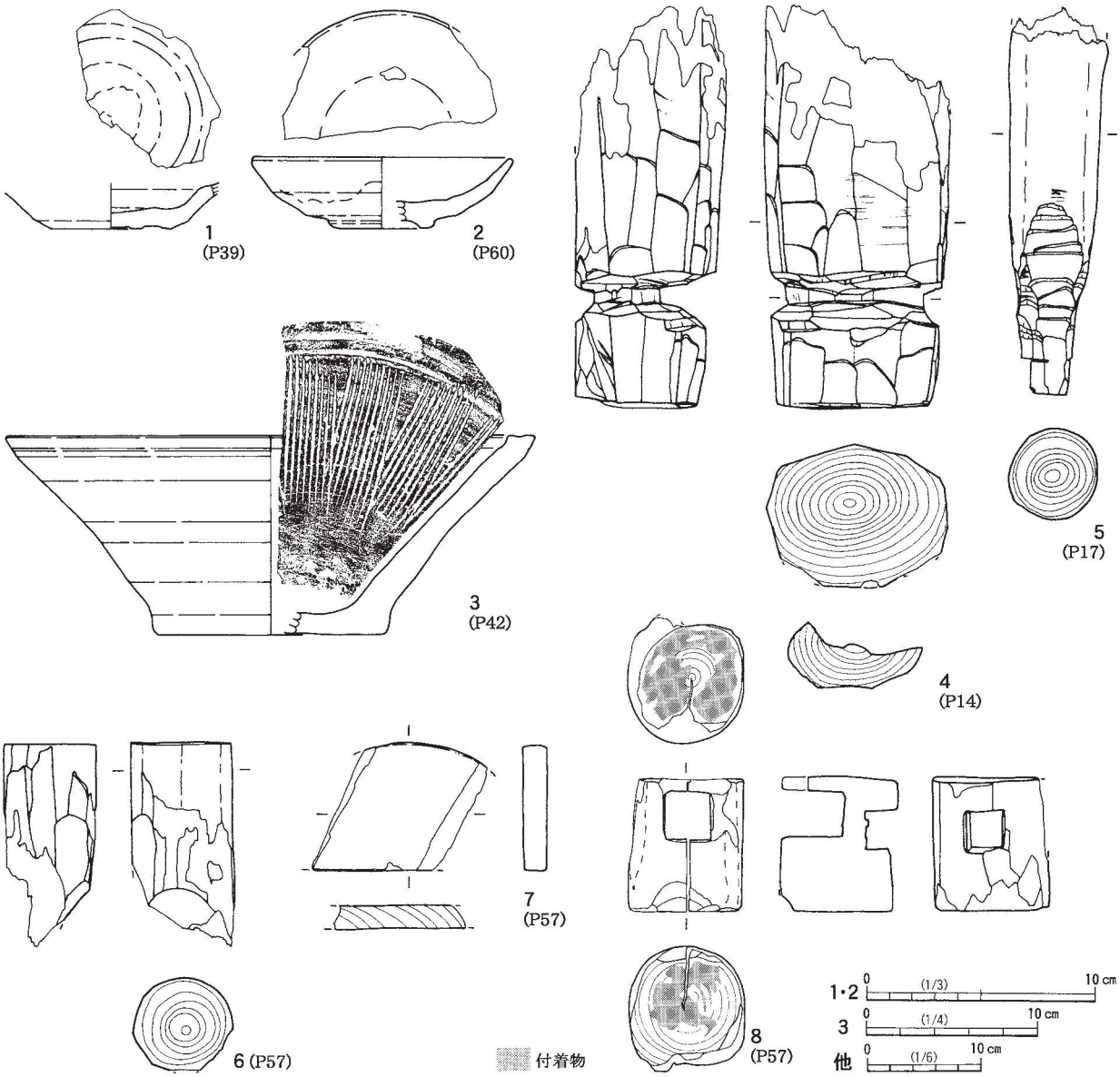


P44
1層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。鉄分粒少量含む。
P45
1層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。青灰色シルトブロック少量含む。
P46
1層　7.5Y4/3　褐色土　粘性・しまり強い。鉄分粒多量，鉄分小ブロック少量含む。
2層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性・しまり強い。
P47
1層　5Y3/1　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。細砂粒微量含む。
P48
1層　2.5Y4/1　黄灰色混砂土　粘性・しまり弱い。
P49
1層　2.5Y4/1　黄灰色混シルト質土　粘性・しまり弱い。シルトブロック多量含む。
P50
1層　5Y3/1　黒褐色土　粘性・しまり弱い。細砂粒微量含む。
P51
1層　5Y3/1　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。
2層　5Y5/1　灰色シルト質土　粘性・しまり弱い。黒褐色土ブロック含む。
P52
1層　10YR4/1　褐灰色土　粘性強く，しまり弱い。砂粒シルトブロック少量含む。
2層　5Y4/1　灰色土　粘性強く，しまり弱い。砂粒少量含む。
3層　5Y5/4　灰オリーブ色砂質土　粘性・しまり弱い。浅黄色の砂に灰色土が混じる。
P53
1層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性・しまり弱い。シルトブロック多量，細砂粒微量含む。
P54
1層　2.5Y5/1　灰色砂質土　粘性・しまり弱い。



P55
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。青灰シルトブロック多量含む。
2層　5Y6/1　灰色シルト質土
P56
1層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性強く，しまり弱い。浅黄色シルトブロック多量含む。
P57
1層　7.5Y4/1　灰色粘質土　粘性・しまり強い。
P58
1層　2.5Y5/2　暗灰黄色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒・細砂粒・炭化物粒微量含む。
P59
1層　5Y4/1　灰色土　粘性強く，しまり弱い。
P61
1層　2.5Y5/2　暗灰黄色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒・細砂粒微量含む。
P62
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。鉄分・細砂粒微量含む。
P63
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強・しまり弱。シルト少，ブロック少。
2層　2.5Y5/2　暗灰黄色土　粘性普通，しまり弱い。細砂粒多量含む。
3層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。
P64
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。
P65
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性強く，しまり弱い。
P66
1層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性・しまり弱い。
2層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性強，しまり弱。砂粒微量，鉄分少量含む。
P67
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く，しまり弱い。シルト粒・鉄分粒多量含む。

第8図　第20-1地点　確認面①の遺構断面(3)



第9図　第20-1地点　確認面①の出土遺物

（2）確認面②の遺構と出土遺物

確認面②は基本土層Ⅲ層の上面にあたる。Ⅲ層はほとんど遺物を含まない層だが，わずかに19世紀代（～幕末）の遺物を含んでおり，遺構出土の最新遺物も同時期の製品であることから，この面で確認した遺構を当該期に位置づけた。掘立柱建物1棟・ピット18基を検出した（第10・11図）。

なお，調査区南西部(Ｅｃ3-1～Ec5-4以西)の一角は，特に深くまで撹乱が及んでおり，ここで検出した遺構は帰属面が不明である。しかし，配列上，確認面②の遺構である1号掘立柱建物の一部と考えられるピットについては，確認面②に掲載した。また，確認面①で検出したピットのうち，Ｐ83は配列から確認面②の1号掘立柱建物の一部と考えられる。これを，本来確認面①に帰属する1号掘立柱建物のピットのほとんどが確認面①で検出できず，下層での確認となったとみるべきか，確認面②のピットであるＰ83が，埋め土の沈み込み等により，上層である確認面①で早くも検出できてしまったとみるべきか，判断の難しいところだが，確認面①で検出したピ

ットは一基のみであることから，後者の可能性が高いと考え，確認面②（第10図）に掲載した。

この他，基本土層Ⅲ層とⅣ層は土色が著しく異なるため，明確に識別でき，この境目に当たるⅣ層上面でも遺構の確認が可能であったことから，層理面を精査し，遺構の検出に努めた(確認面③)。しかし，この面では新たな遺構の検出はなかった。

掘立柱建物　１棟を確認した(第10図，図版４・５)。１号掘立柱建物は２間×３間（Ｐ77～83・88・93）だが，東側の，ピット規模が大きく，ピット短径40cm前後の２間×２間（Ｐ80～83・88・93）と，西側の，東側より細いが同様の間隔で柱穴が並ぶ１間分（Ｐ77～79）によって構成されている。東側の２間×２間は，桁行が約2.5ｍでほぼ均等，ピット・柱根形状等が類似することから，組み合う柱穴列と判断したが，梁間の柱は北に寄っている。西側1間分は，この梁間の偏りに沿う形でピットが並ぶため，東側の主構造に沿う，付属的な構造と考えている。建物の主軸は西偏85度で，ほぼ東西方向に伸びる。調査区の南辺・西辺に寄っているため，さらに南・西に広がる可能性がある。

東側のピットのうち，Ｐ83・88はピットの底に礎盤石が据えられており，Ｐ80もやや底から浮くものの，下部に礎盤石が据えられていた。Ｐ83は礎盤石上に柱根が残っており，Ｐ82も中央に柱根が据えられた状態で出土した。共にクリの丸木材で，直径25cm前後。Ｐ83の柱根（第11図９）は底面の半分が平ら，半分が斜めで，伐採時の状態をそのまま残している。側面側にはＬ字状に貫通する穴が穿たれており，運搬時の縄掛け用，または，他の用途に用いられていた際の痕跡の可能性がある。Ｐ82柱根(第11図10)の下面には加圧によるものと見られる砂を絡んだ付着物がある。一方，Ｐ81・93は礎盤石を持たないものの，柱の入る隙を残して周囲に栗石が込められた状態で出土した。また，建物プランの北東角・東辺中央に柱穴はないが，撹乱により失われた可能性を考えている。

西側のピットのうち，Ｐ77はピット上部に平らな石が据えられていたが，礎盤石と判断するには少々小さい。Ｐ78・79はピットが底付近で非常に細くなり，打ち込み杭の可能性を持つ。

遺物が出土したピットは少なく，ピット２基のみであった。Ｐ81：黒平瓦片２点，Ｐ83：瀬戸・美濃の天目茶碗（15世紀，図版７-①）１点が出土した。

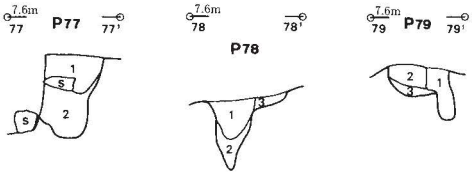
ピット　建物の柱穴を除き，18基を検出した(第10図，図版５)。このうち，Ｐ72は底部に礎盤石を据え，その上に黒瓦が敷かれた状態で出土した。Ｐ84は柱の入る隙を残して，周囲に栗石が込められた状態で出土。共に土層で柱痕が確認できる。Ｐ87・90はピット底から，腐食が著しいものの柱根が出土した。ピットの深さ・形状・柱根の状態等が共通しており，東側へ延びるピット列の可能性があるが，２本しか確認できていないため，ピット列とはしなかった。Ｐ91は柱の入る隙を残して，周囲に割石が込められた状態で出土。Ｐ89の底部にも石が据えられていたが，上面が斜めに傾いており，礎盤石とは断定しがたい。

その他，次の遺構から，図化には堪えない小片遺物が出土している。Ｐ72：中国染付碗1点（17ｃ初頭），唐津焼２点（ともに17世紀），黒平瓦片２点，鉄釘類２点。Ｐ86・87：ともに古代の土師器片１点，Ｐ90：産地不明の近世陶器(19世紀代)１点，Ｐ92：黒丸瓦片1点。

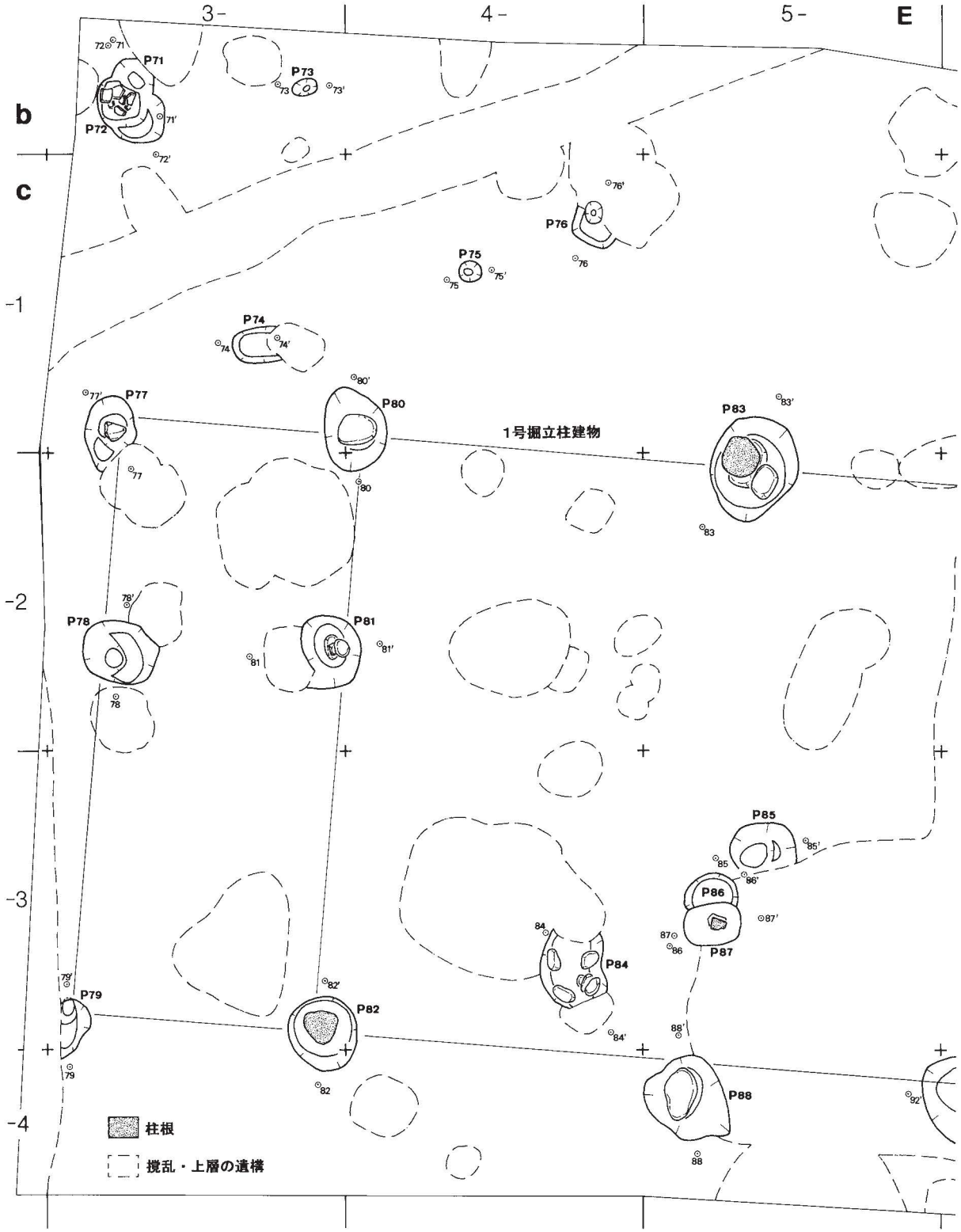
（３）確認面④の遺構と出土遺物

確認面④は基本土層Ⅴ層の上面にあたる。上層のⅣ層が古代の遺物をわずかに含むことから，この面で確認した遺構は古代以降と判断したが，検出遺構はピット１基(Ｐ98)のみである（第12図）。

≪１号掘立柱建物≫

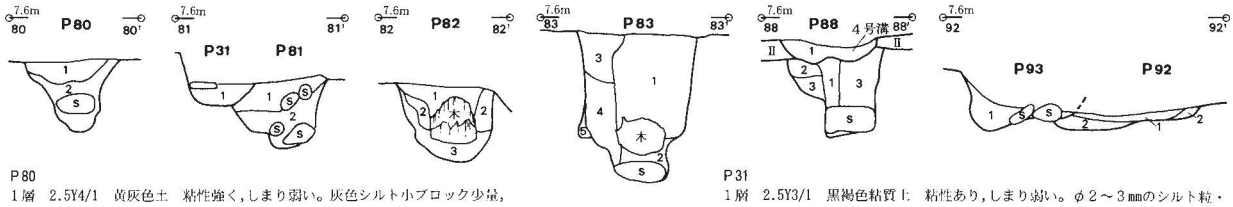


P77
１層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性・しまり強い。灰黄色シルト小ブロック少量含む。
２層　2.5Y4/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。シルト粒・鉄分粒・砂粒少量含む。
P78
１層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く,しまり弱い。シルトブロック少量,細砂粒微量含む。
２層　5Y4/1　灰色シルト質土　粘性・しまり弱い。シルトブロック多量,明灰黄色土ブロック少量含む。
３層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性強く,しまり弱い。
P79
１層　7.5Y4/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。
２層　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性強く,しまり弱い。砂粒少量含む。
３層　7.5Y4/2　灰オリーブ色砂　粘性・しまり弱い。砂と黒褐色土が混じる。



第10図　第20-1地点　確認面②の遺構配置と遺構断面(1)

≪１号掘立柱建物(つづき)≫



P80
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く,しまり弱い。灰色シルト小ブロック少量,細砂粒微量含む。
2層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性強く,しまり弱い。

P31
1層　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　粘性あり,しまり弱い。φ2～3㎜のシルト粒・炭化物粒・砂粒少量含む。

P81
1層　10YR3/2　黒褐色土　粘性ややあり,しまり良い。φ3～5㎜炭化物粒少量,φ5㎜のシルト粒多量含む。
2層　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　粘性強く,しまり普通。φ5㎝のシルトブロックをまだらに含む。

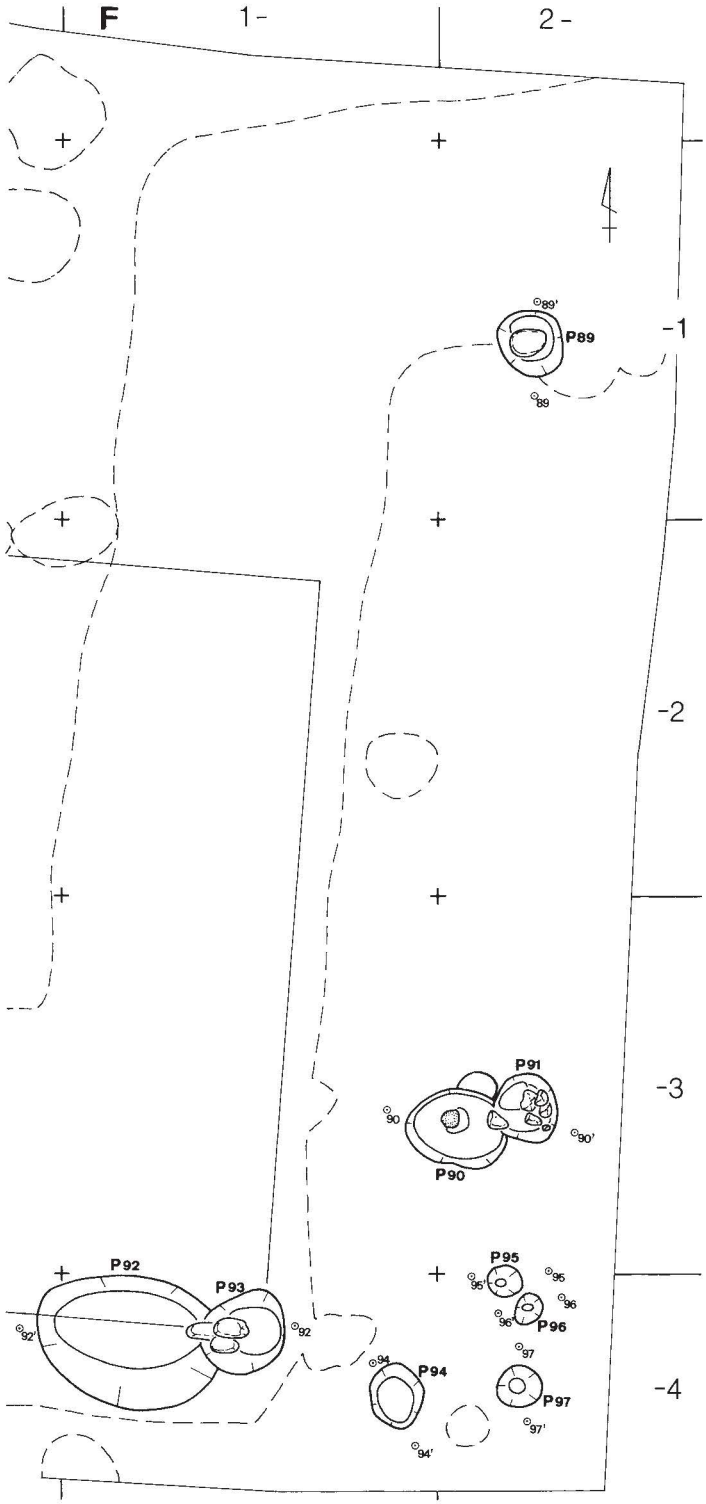
P82
1層　7.5Y3/1　オリーブ黒色土　粘性・しまり弱い。砂粒微量,シルトブロック少量含む。
2層　7.5Y2/1　黒色土　粘性・しまり弱い。砂粒微量含む。
3層　7.5Y5/1　黒褐色土　粘性強く,しまり弱い。灰色砂ブロックがまだらに入る。

P83
1層　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　粘性あり,しまり悪い。
2層　5Y4/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。灰白色シルトブロック少量含む。
3層　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　粘性あり,しまり良い。φ2～3㎝のシルトブロックをまだらに多量含む。
4層　2.5Y2/1　黒色粘質土　粘性あり,しまり弱い。鉄分少量含む。
5層　5Y5/1　灰色粘土　粘性強く,しまり弱い。黒褐色土粒シミ状に含む。人為的に掘られたというよりも土圧による沈下にともない引っぱられた部分。

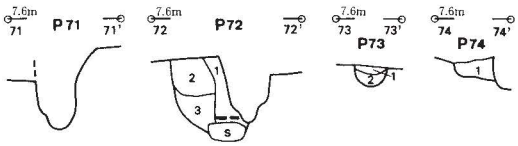
P88
1層　2.5Y3/1　黒褐色土　粘性強く,しまり弱い。砂粒少量,炭化物粒微量含む。
2層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く,しまり弱い。細砂粒微量含む。
3層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性極強,しまり弱い。浅黄色シルトブロック多量に含む。

P93
1層　5Y5/1　オリーブ黒色土　粘性強く,しまり弱い。砂粒微量含む。

P92
1層　5Y4/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。砂粒微量含む。
2層　5Y5/1　灰色シルト質土　粘性強く,しまり弱い。灰白色シルトに灰色土粒が混じる。



≪ピット≫

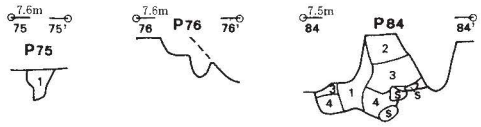


P71
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性強く,しまり弱い。細砂粒少量含む。

P72
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　粘性強く,しまり弱い。鉄分粒少量含む。
2層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性強く,しまり弱い。浅黄色シルトブロック多量,砂粒微量含む。
3層　2.5Y4/3　オリーブ褐色シルト質土　粘性強く,しまり弱い。シルトと黄灰色土がまだらに混じる。

P73
1層　2.5Y4/1　黄灰色土　粘性強く,しまり弱い。細砂粒微量含む。
2層　5Y5/1　灰色シルト質土　粘性・しまり弱い。

P74
1層　2.5Y5/2　暗灰黄色土　粘性強く,しまり弱い。シルト粒少量,細砂粒微量含む。

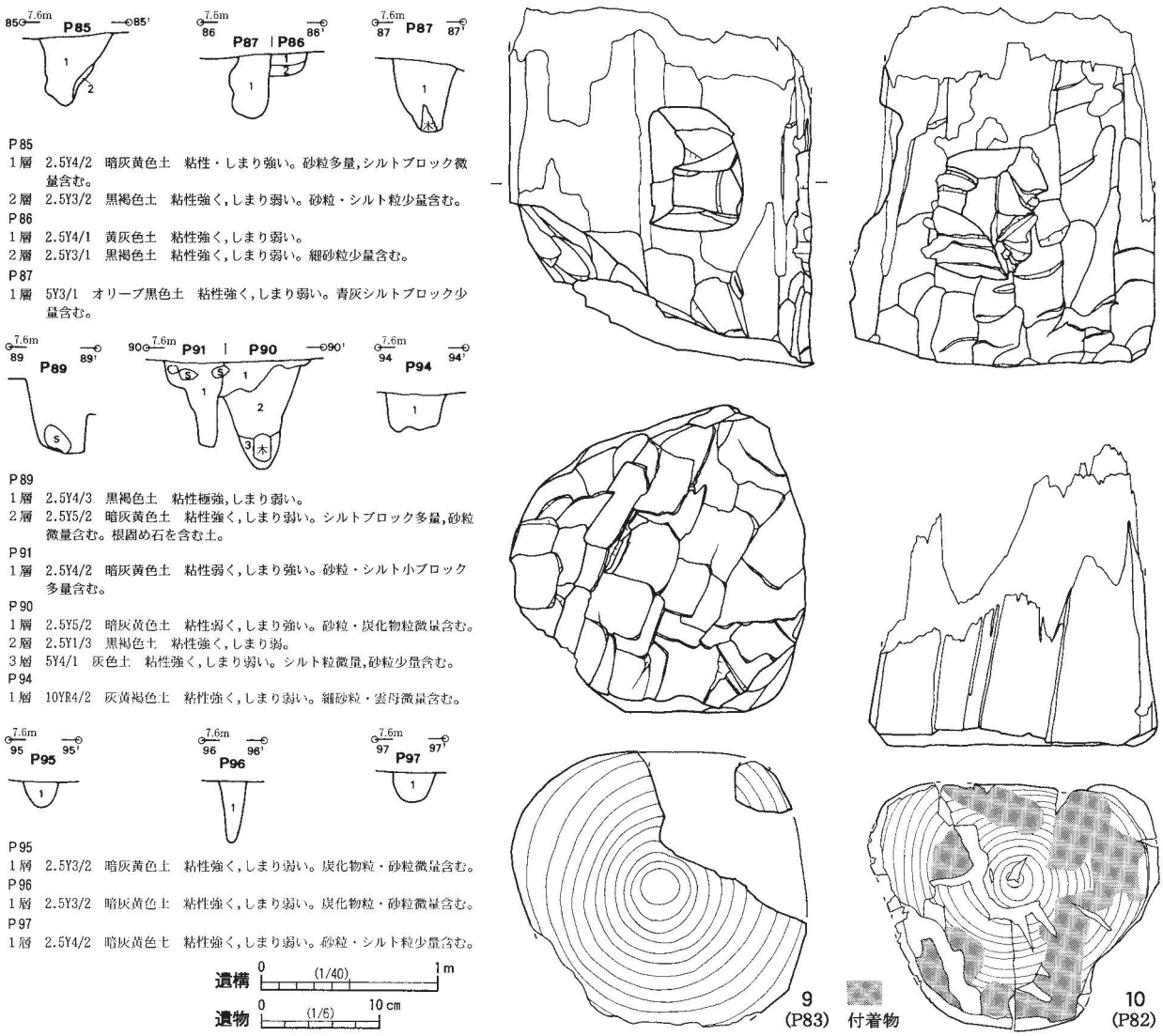


P75
1層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性強く,しまり弱い。

P76
1層　2.5Y5/2　暗灰黄色土　粘性強く,しまり弱い。シルト粒少量,細砂粒微量含む。

P84
1層　5Y4/1　灰色土　粘性・しまり弱い。砂粒・炭化物粒多量,シルト粒少量含む。
2層　2.5Y4/2　暗灰黄色土　粘性強く,しまり弱い。砂粒・シルト粒多量含む。
3層　5Y5/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。青灰シルト小ブロック・砂粒少量含む。
4層　5Y4/1　灰色土　粘性強く,しまり弱い。シルト粒・細砂粒少量含む。

0　(1/40)　1m



第11図　第20-1地点　確認面②の遺構断面(2)と出土遺物

（4）その他の出土遺物

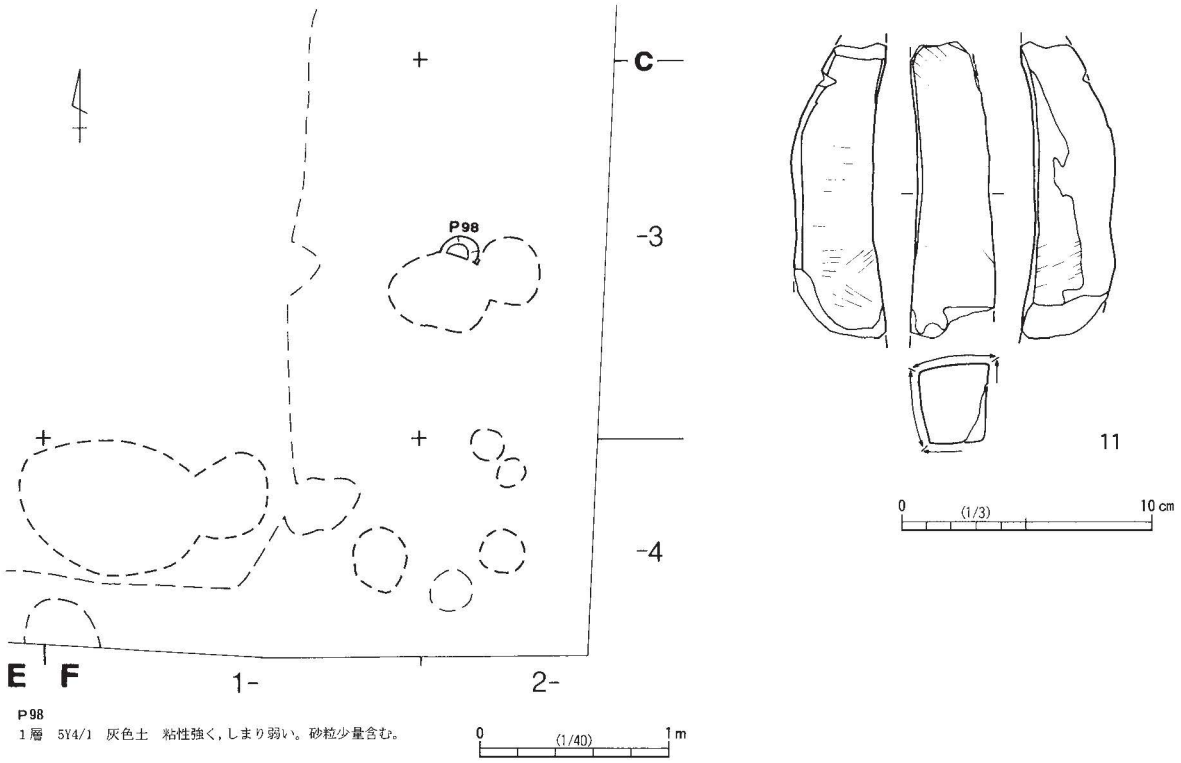
遺物包含層および表土・撹乱からの出土遺物に付いて記述する。いずれも出土量はわずか，かつ小片で図化に堪えないものがほとんどだが，これらを根拠に，各層の時代を判断した。

表土・撹乱の遺物　19世紀代を主体とする近世陶磁器類（平箱1／3箱分），黒瓦８点，近代の磁器1点・施釉瓦２点，中近世カワラケ３点，古代ロクロ土師器４点，などが出土した。

遺物包含層(Ⅱ層)の遺物　近世陶磁器７点，火鉢類１点，黒瓦５点，古代土師器１点が出土した。

遺物包含層(Ⅲ層)の遺物　近世陶器(19世紀～幕末)1点，古代土師器・須恵器各1点が出土した。

遺物包含層(Ⅳ層)の遺物　タタキメ等を有する古代の土師器片5点，砥石1点（第12図11）が出土した。



第12図　第20-1地点　確認面④の遺構とⅣ層の遺物

3．第20-2地点

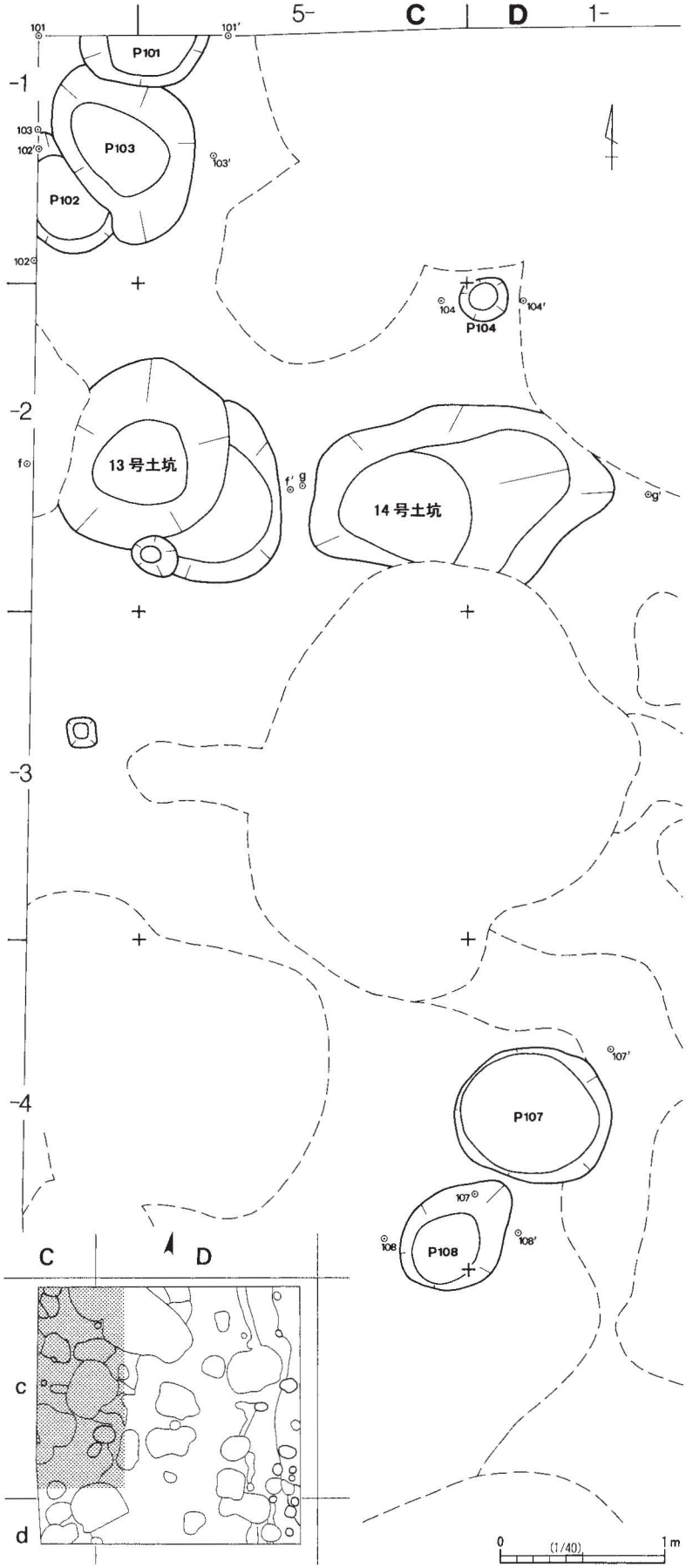
（1）遺構と出土遺物

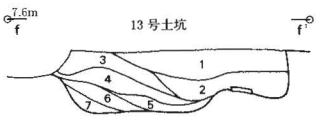
第20-2地点は大部分が大小の撹乱により壊されており，特に中央部は大規模な撹乱を受けており，東辺と西辺にのみ遺構が遺存していたため，遺構の遺存部分を東西に分けて掲示した(第13・14図，図版6)。第20-1地点に比べて検出できた遺構が非常に少なく，土坑3基・ピット18基のみである。また，全ての遺構は，Ⅴ層まで及ぶ撹乱等の底面で検出しており，遺構確認面を根拠とした時期判断はできなかった。出土遺物から判断する限り，大半は近世の遺構であるが，15号土坑のみ古代の遺物がまとまって出土したため，古代の遺構とした。

土　坑　3基を検出した。13・14号土坑は近世の遺構で，明確な掘り込みを持つが平面形状は不整形。ともに図化に堪えない小片ながら，13号土坑からは産地不明の端反碗（19世紀～幕末）を含む近世陶器2点を，14号土坑からは瀬戸・美濃の小皿1点（大窯第1～2段階：16世紀前半）と古代の土師器・須恵器8点が出土している。15号土坑は，深さわずか10cmほど埋土中から，小片ながら古代の遺物のみ39点が出土。うち，34点が土師器甕類の破片。ハケメ・ロクロメ・カキメ・タタキメ等が観察でき，土師器椀と判断できる破片は含まれていない。須恵器は杯類の破片5点が出土しており，粗い胎土のいわゆる在地産が多いが，胎土精良で焼成良好な，佐渡産とみられるものを1点含む。これらの出土遺物から9世紀代の遺構と判断した。

ピット(第13・14図，図版6）18基を検出したが，柱穴であることを示すような痕跡はほとんどなく，P117の底部に平らな礎盤石が据えられていたのみである。

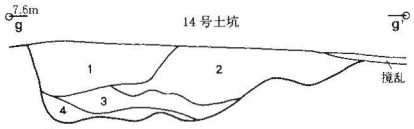
遺物は，P103からは産地不明の灰釉碗（第15図12，19世紀～幕末）を含む近世陶器5点と，黒瓦2点が出土。うち，黒瓦1点は外面に一重角枠内「大坂瓦司中山市郎右衛門」の刻印を持つ丸瓦（第15図13）。この他，小片ながらP104からは産地不明の近世陶器1点，P107からは珠洲焼の片口鉢1点（第15図14，珠洲Ⅳ期：13





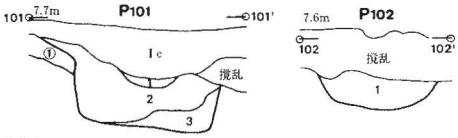
13号土坑

1層　2.5Y3/1　黒褐色土　φ2～3mmのシルトと黒色土をまだらに含む。
2層　2.5Y3/2　黒褐色土　中にφ2～3cmのシルトを多量に含む。
3層　2.5Y5/2　暗灰黄シルトと砂をまだらに含み、オリーブ黒色土を少量含む。
4層　2.5Y3/2　黒褐色土　φ2～3mmのシルトと黒色土をまだらに含む。2層に似た土。
5層　5Y2/1　黒色粘質土　オリーブ黒色土をまだらに含む。
6層　5Y3/1　オリーブ黒色土　φ1～2cmのシルトブロックを多量に含む。
7層　2.5Y5/2　暗灰黄色混シルト砂層　φ1～2cmのシルトブロックを多量に含む。しまり弱い。



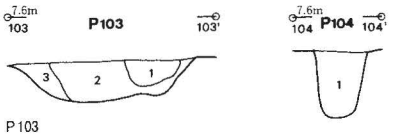
14号土坑

1層　5Y3/1　オリーブ黒色土　φ0.5～1cmのシルトと砂利を少量含む。
2層　2.5Y2/1　黒色土　φ2～5cmのシルトブロックを多量に含む。
3層　2.5Y4/2　暗灰黄色シルト　砂混じり。
4層　2.5Y3/2　黒褐色粘質土　細かい木片を含む。



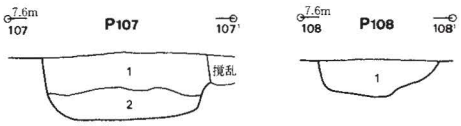
P101
1層　黒色土(土壌化した炭化材?)と赤色土(焼土?)の塊　φ2～3cmを多量に含む。
2層　5Y3/1　オリーブ黒色土　細かい砂利を含む。粘性無し、しまり普通。(遺物出土)
3層　5Y3/1　オリーブ黒色土　やや粘質あり。
①層　5Y3/1　オリーブ黒色土　φ3～5mmのシルト粒を含む。上下の漸移層か?

P102
1層　5Y3/1　オリーブ黒色土(砂利とシルト粒を少量含む。)



P103
1層　5Y3/1　オリーブ黒色土　砂利含む。
2層　5Y3/2　暗褐色土　φ2～3cmのシルトブロック混じり。しまりややゆるい。
3層　5Y3/1　オリーブ黒色土　φ2cmの炭化物粒目立って含む。

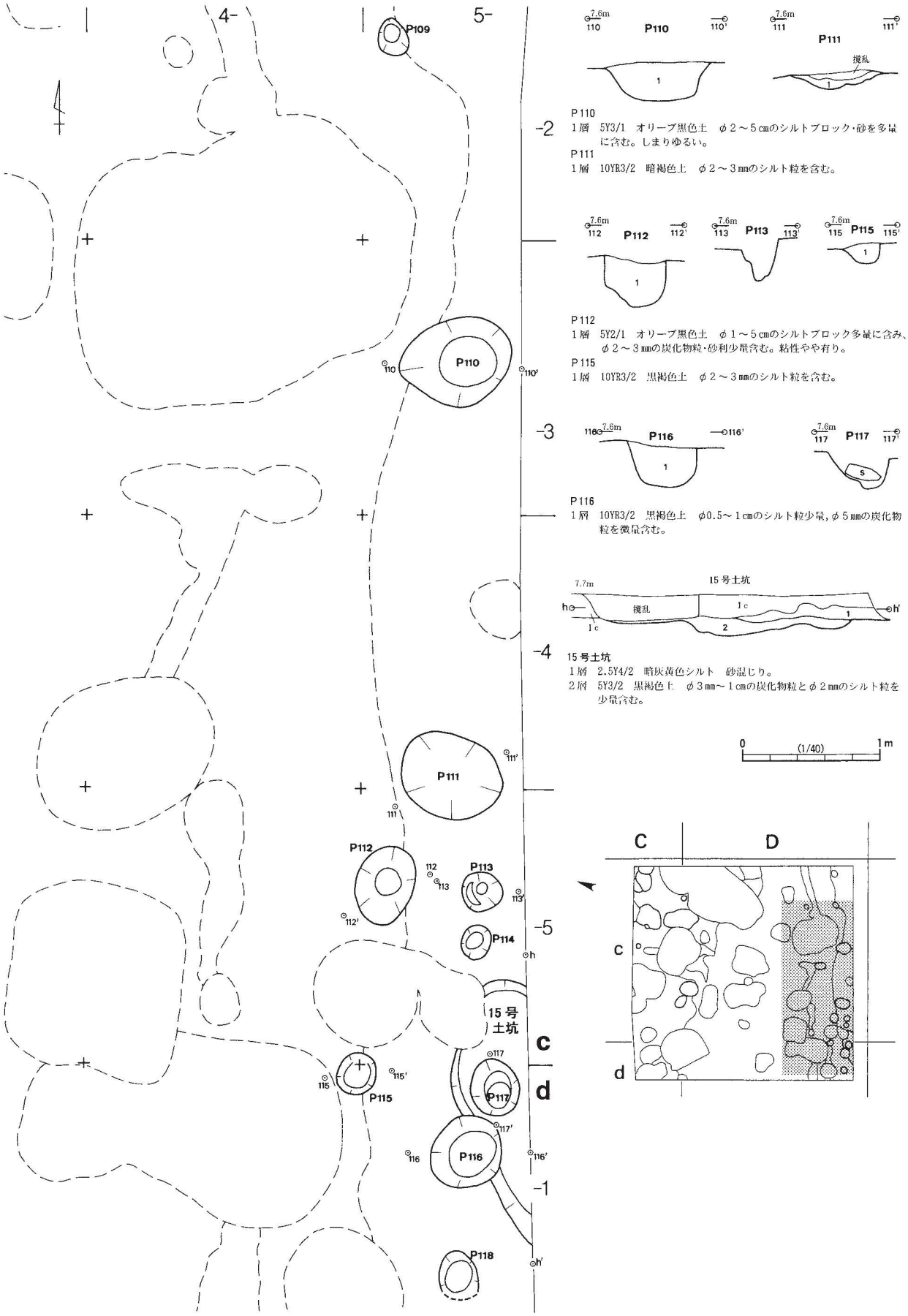
P104
1層　2.5Y3/2　黒褐色土　φ1～2cmをまだらに含み、砂粒少量。



P107
1層　5Y3/1　オリーブ黒色土　φ2～5cmのシルト粒・砂利多量に含む。しまり普通。
2層　5Y3/1　オリーブ黒色土　φ3～5cmのシルト・細砂ブロック多量に含む。

P108
1層　2.5Y3/1　黒褐色土　φ1cmのシルト粒少量、砂粒多量に含む。しまりややゆるい。

第13図　第20-2地点　西側遺構配置と遺構断面



第14図　第20-2地点　東側遺構配置と遺構断面

世紀後葉～14世紀中葉頃）と，19世紀代(～幕末)の端反碗を含む近世陶器２点，Ｐ116からは瀬戸・美濃の天目茶碗（15ｃ前半）1点が出土した。

（2）その他の出土遺物

遺物の大半はＩ層および撹乱からの出土である。出土遺物は日常雑器を主体としており，外部遠隔地から意図的に運び込まれたものではなく，隣接地等で使用されたものが，近隣での土地利用により混入したものと考えている。このため，今回調査地点の遺構・遺物包含層との直接的な関係を確認できないものの，新発田城内や城下で流通・使用されていたものを捉えるという観点から，近世以前の遺物についてはこれらの遺物も含めて掲載した。近世，特に19世紀代(～幕末)の遺物を主体としているが，いずれも小片である。

表土・撹乱の遺物（第15・16図）

＜磁　器＞　平箱１／３箱分が出土した。小片で大まかな器種しか特定できないものも多いが，ほとんどが碗皿類である。主体を占めるのは19世紀代(～幕末)の製品で，一部それ以前にさかのぼる製品も含む。

碗（15～18）：染付碗類89点が出土，うち，図化に堪えうる４点を掲載した。15～17は肥前染付で，15・16は網目文・二重網目文を描く（18世紀代）。15は見込みにコンニャク印判を持つ。17は18世紀以降隆盛する大ぶりの碗。18は発色の悪い染付碗（産地不明：19世紀代）。この他，端反碗・筒形碗・丸碗や，口縁を釉剥ぎした蓋物もあり，19世紀代を主体とする。中に，肥前産と見えるもの16点を含み，高台砂付きの碗1点（肥前Ⅱ期：17ｃ前半），小広東碗5点（18世紀後葉），腰張碗２点（18世紀後半），厚手碗3点（18世紀代），くらわんか手1点（18世紀以降），半球碗２点（18世紀以降），筒茶碗1点（18世紀後半），端反碗・筒丸茶碗各1点（19世紀以降）などがある。瀬戸・美濃の端反碗５点や，少ないが肥前青磁碗２点も出土した。

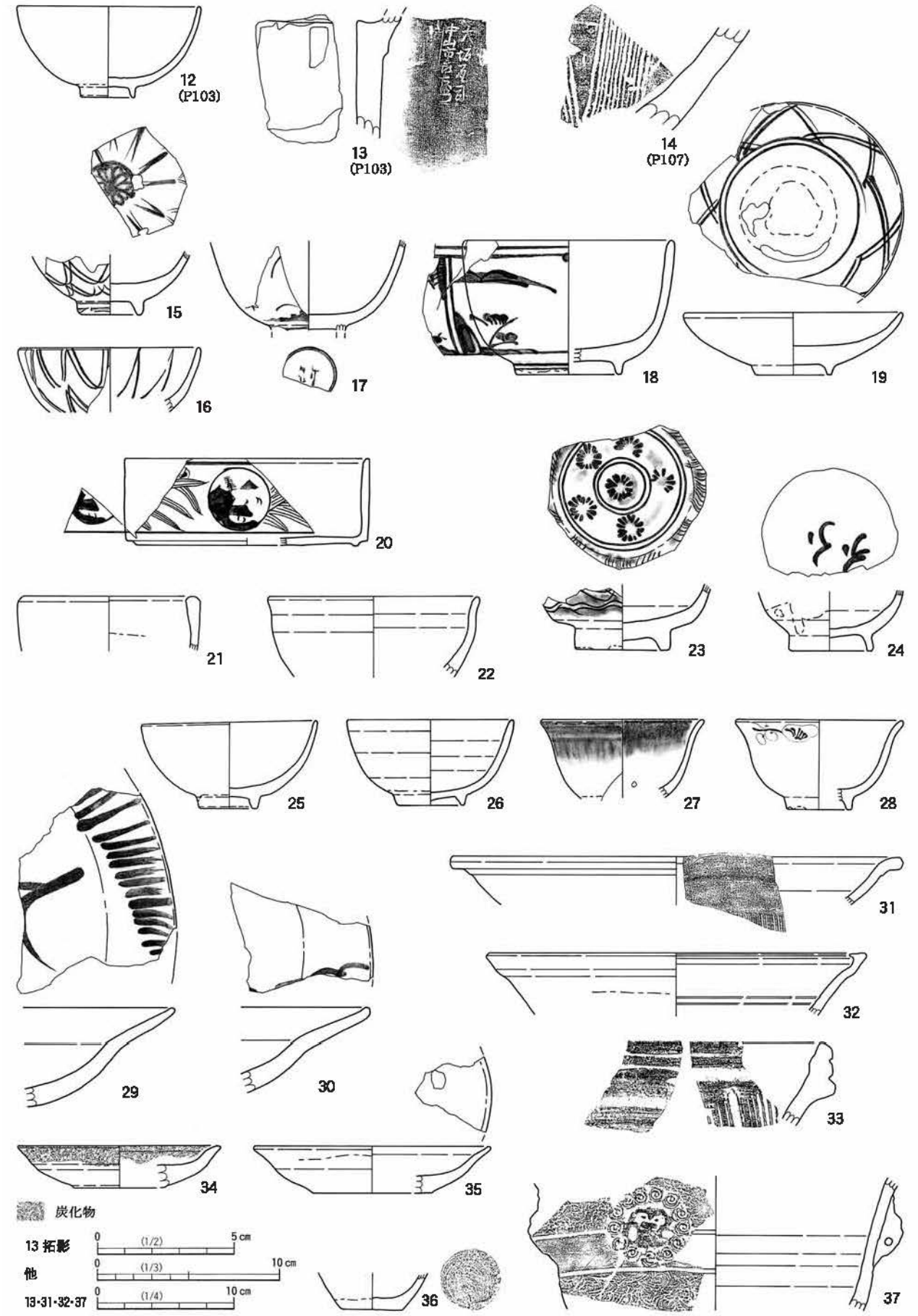
皿(19)：染付皿類18点が出土した。ロクロ成形の小皿・中皿を主体とするが，型打技法併用の，変形小皿（足つき）や芙蓉手の皿などを含む。この中に，明らかに肥前産と見える製品４点があり，見込みを蛇の目釉剥ぎする厚手の小皿（第16図19，18世紀～19世紀前葉），渦福の銘を持つ皿（18世紀前半），蛇の目凹形高台の皿（18世紀～幕末）を含む。また，中国製染付薄手皿（明代末～清代初頭）１点も出土。

その他の染付製品は少ないが，肥前の段重（第16図20）1点，蛸唐草文を描く油壷（18世紀末～19世紀）1点，瓶３点（うち1点は明代末～清代初頭の中国製染付），水滴２点，瓶１点，仏飯器1点，器種の判定できない細片68点が出土している。また，肥前青磁の香炉（第16図21）1点が出土した。

＜陶　器＞　平箱２／３箱分が出土した。主体を占めるのは19世紀代の製品であり，一部，それ以前にさかのぼる製品を含む。碗類が大半だが，小片で器種の特定できないものも多い。

碗（22～28）：中小碗類119点が出土，うち７点を掲載した。22は瀬戸・美濃の天目茶碗（大窯第３段階：16世紀後半）。23・24は唐津碗で,23は三島手（肥前Ⅱ期：17世紀前半），24は小碗（肥前Ⅱ～Ⅲ期：17世紀前半）。その他は19世紀代の製品で，25・26は産地不明の小振りな丸碗。27・28の端反碗は，27が京都・信楽,28が瀬戸・美濃。この他，産地の判別できるものに，肥前の碗３点（肥前Ⅰ～Ⅱ期：17世紀前葉）,瀬戸・美濃刷毛目碗1点（18世紀後半以降），京都・信楽の半球碗２点（17世紀後半～18世紀前半）と端反碗1点（18世紀末以降），萩焼の藁灰釉のかかった開口碗(図版８-②)などがある。

皿（29・30・35）：大小および鉢の可能性のある破片を含め43点が出土，うち唐津３点を掲載した。29・30は鉄絵皿（肥前Ⅰ-2～Ⅱ期： 17世紀前半）で，29はやや深身。34は小皿（Ⅰ-2期：17世紀初頭）。この他，産地の判別できる製品には，唐津鉄絵大皿1点（肥前Ⅰ期：17世紀初頭）・段皿1点（肥前Ⅱ期：17世紀前半）・刷毛目鉢1点（肥前Ⅲ～Ⅳ期：17世紀後半～18世紀）・皿２点（肥前Ⅰ～Ⅱ期：17世紀前半），瀬戸・美濃の鉄絵大皿



第15図　第20-2地点　出土遺物(1)

1点などがある。

その他，食膳具には，小杯1点，肥前鉄絵向付1点（肥前Ⅰ期：17世紀初頭），判別不能なもの89点があった。

土瓶類：31点が出土した，ほぼみな19世紀代。うち山水土瓶片が16点ともっとも多く，他に，灰釉３点，褐色釉２点がある。

瓶　類：燗徳利に近い白色薄手の瓶類が40点と最も多く，ほぼみな19世紀代。鉄絵を描く３点含む。この他，肥前唐津の徳利（刷毛目刳り底。肥前Ⅲ～Ⅳ期：17世紀後半～18世紀）と，厚手の産地不明品２点が出土した。

擂鉢・鉢類（31～33）：21点が出土。うち，産地の特定出来たものは，31の肥前擂鉢（肥前Ⅳ～Ⅴ期：18世紀以降）他，肥前1点(肥前Ⅱ～Ⅲ期：17世紀)，瀬戸・美濃1点(19世紀代)，堺１点（18世紀後半～19世紀），越前1点(近世)のみ。その他は，図化した32・33も含め，産地不明である。

甕・壺類：13点が出土したが，小片で図化に堪えうるものはなく，詳細な器種は特定出来ない。肥前２点（うち１点は内面に同心円の叩き目を残す甕の頸部（肥前Ⅰ～Ⅱ期：17世紀前半））と，備前1点を含むが，大半は産地も特定できない。

燈明皿（34）：６点が出土。うち１点を図化した。34は口縁内外への炭化物の付着が顕著だが，産地不明。この他，図化不能な小片ながら，肥前１点（Ⅰ～Ⅱ期： 17世紀前半），信楽２点を含む。

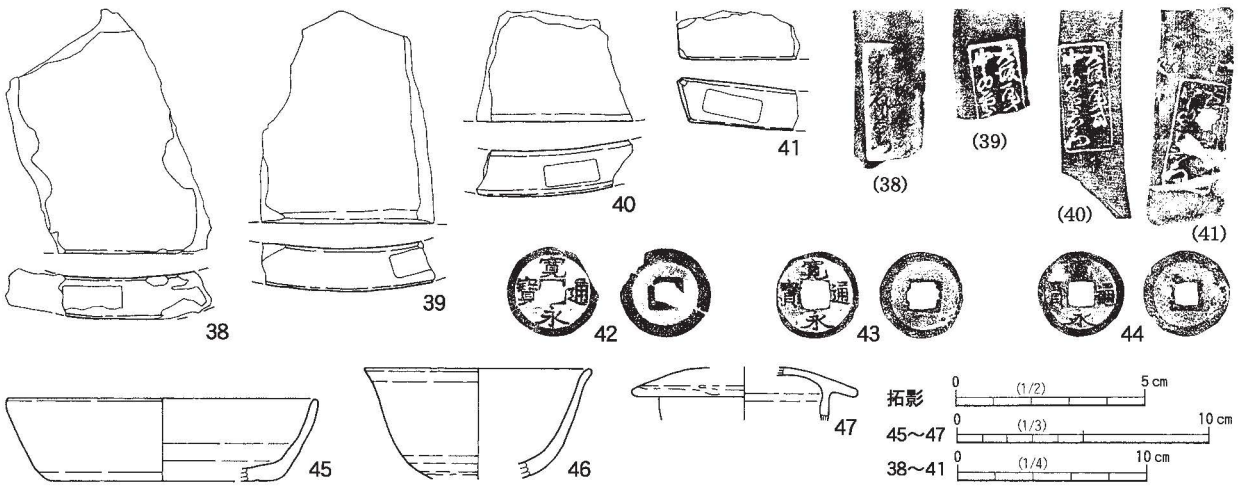
その他，点数が少ないながら，瀬戸の茶入れ1点（第16図36），火入れ？（内面無釉，筒形）1点，土鍋類４点（いずれも鉄釉で褐釉２点・黒釉２点）などが出土した。

＜瓦質土器＞　火鉢２点が出土し，遺存状態の良好な1点を図化した（第16図37）。37は内外黒色の火鉢で，側壁に貫通孔のある獅子頭形の把手を持つ。

＜瓦＞　一定量出土したが，いずれも黒瓦である。すべて破片であり，法量の計測できるような出土品はない。押印の認められるものは多くはないが，遺構を含めると丸瓦１点と平瓦４点があり，このうち平瓦はすべて，小口に同一範の刻印（一重角枠内に草書風の「大坂瓦司中山市朗右衛門」）を持つ点（第16図38～41）は，一定の傾向として指摘できよう。瓦に具体的な地名・人名をいれるようになったのが19世紀以降であり，新発田城でも同様の状況と予測されていることから(伊藤ほか2008)，本資料もこれらの時期と考えられよう。

＜玩　具＞　おはじき２点，土人形の破片1点が出土した。おはじきは，印花文を持つ肥前染付碗類破片の周辺を打ち欠いて，円形に仕上げた転用品である。

＜銭貨・金属製品＞　古銭３点，キセルの吸い口２点，和釘１点，鎹1点等が出土した。この内，銭貨３点を



第16図　第20-2地点　出土遺物(2)

掲載したが（第16図42～44），いずれも寛永通寶で，背面は無文。42は古寛永（17世紀中葉鋳造），43・44は新寛永（17世紀後葉～18世紀後葉鋳造）である。

＜石製品＞　硯２点，砥石３点が出土したが，いずれも破片のため，法量等の計測は不能。硯は２点とも青灰色の斑の入る粘板岩製で，おそらく高島硯。砥石は中砥が１点，仕上げ砥が２点である。

＜古代の遺物＞　図化に堪えない小片ながら，ロクロメ・ハケメ・カキメ・ケズリ痕等を持つ，ロクロ土師器甕類が出土。小甕を含むが，土師器椀類と須恵器は少なく，胎土の精良な土師器椀類片1点と，鉱物粒を目立って含む，粗い胎土で焼成がやや甘い，いわゆる在地産の須恵器無台杯1点（第16図45）が出土した。

＜中世の遺物＞　小片ながら，青磁碗１点・青磁皿１点，越前焼の破片1点(器種不明）が出土。

遺物包含層Ⅱ層の遺物　Ⅱ層の遺存範囲が狭いこともあり，出土遺物は少ない。かろうじて図化に堪えうる近世陶器２点を掲載した（第16図46・47）。ともに19世紀代の遺物で，この他，近世陶磁器14点，古代土師器片1点が出土している。

遺物包含層Ⅲ・Ⅳ層の遺物　20-２地点では層の堆積が非常に薄く，Ⅲ・Ⅳ層の分離が不可能であったため，遺物は一括しての取り上げとなった。また，層の遺存範囲が狭いせいもあり遺物は非常に少ない。出土したのは古代の土師器甕数点であり，おそらく２個体が存在する。ロクロメ・カキメが観察でき，平底の甕を含む。明らかに土師器椀と判断できる破片は含まれておらず，９世紀代の遺物と考えている。

表２　遺構一覧

調査地点	遺構名	グリッド	底面標高(m)	確認面	特徴,その他(明らかな重複関係を旧→新と表記)	挿図	図版
20-1	1号ピット列	Eb		①	ピット間隔3.1m,軸西偏1度	6	—
	(P5)	Eb 3-5	6.821	①	ピット底に平らな礎盤石(石面標高6.935m)。P3→P5→P4。鉄釘類出土。	6	2
	(P22)	Ec 3-2	6.831	①	→P21.17世紀の中国製染付碗と19世紀(～幕末)の陶器出土。	6・7	2
	(P39)	Ec 3-3	6.941	撹乱底	柱の入る間を残してピット下部に栗石充填。16世紀末～17世紀初頭の瀬戸美濃折縁皿出土(No1)。	6	2
	2号ピット列	Ec		①	ピット間隔2.4m,軸西偏88度	6	—
	(P29)	Ec 3-2	7.057	撹乱底	←P78	6	—
	(P32)	Ec 4-2	7.111	①	ピット中位に割石数点。	6	—
	(P38)	Ec 5-2	7.037	①	→2号土坑	6	2
	(P60)	Fc 1-2	7.120	①	17世紀初頭の肥前陶器丸皿出土(No2)。	6	2
	2号土坑	Ec 5-2	7.230	①	←P36・38, 近世陶磁器片出土。	6	—
	4号土坑	Ec 4-3	7.136	①	←P42・84, 近世陶器, 黒瓦, 古代土師器	6	2
	2号溝	Eb3・4-5, Ec 4-1	7.320	①	←P4	6	2
	4号溝	Ec 4-4・5	7.360	①	←P88	6	5
	5号溝	Ec 4-4	7.385	①		6	2
	P1	Eb 3-5	7.145	①	ピット上部に平らな礎盤石(石面標高7.53m),周囲に礫数点。黒瓦・鉄釘類出土。	6	2
	P2	Eb 3-5	6.998	①	ピット底に栗石2点。←P71	6	2
	P3	Eb 3-5	6.895	撹乱底	打ち込み杭跡か。→P4・5	6	2
	P4	Eb 3-5	6.876	①	打ち込み杭跡か。P3・5→P4→2号溝	6	—
	P6	Eb 4-5	7.230	①	17世紀初頭の肥前陶器皿出土。	6・7	2
	P7	Ec 3-1	7.290	①		6・7	—
	P8	Ec 3-1	7.185	①		6・7	2
	P9	Eb 3-5	7.202	①		6・7	2
	P10	Ec 4-1	7.032	①		6・7	2
	P11	Ec 4・5-1	7.121	①	←P76	6・7	2
20-1	P12	Eb 5-5	7.350	①		6・7	—
	P13	Ec 5-1	7.315	①		6・7	2
	P14	Ec 5-1	6.668	①	中心に加工木材(No4)を据え,周囲に栗石充填。柱根?	6・7	3
	P15	Eb 5-5	7.179	①		6・7	3
	P16	Ec 3-1	7.224	①	ピット隅に木材片1点。←P17・74	6・7	3
	P17	Ec 3-1	7.314	①	打ち込み杭出土(No5)。→P16	6・7	3
	P18	Ec 4-1	7.318	①	古代の土師器出土。	6・7	—
	P19	Ec 3-2	6.950	①	ピット隅に割石？1点。←P20・77	6・7	3・4
	P20	Ec 3-2	6.846	①	→P19	6・7	3・4
	P21	Ec 3-2	7.082	①	←P22	6・7	3
	P23	Ec 4-2	7.313	①		6・7	—
	P24	Ec 4-2	7.361	①		6・7	—
	P25	Ec 4-2	7.272	①		6・7	—
	P26	Ec 4-2	7.150	①	打ち込み杭跡か。	6・7	—
	P27	Ec 5-2	7.150	①		6・7	—
	P28	Fc 1-2	7.298	①		6・7	—
	P30	Ec 3-2	6.754	撹乱底		6・7	3
	P31	Ec 3-2	7.130	撹乱底	←P81。黒平瓦出土。	6・7	—
	P33	Ec 4-2	7.325	①	→P34	6・7	—
	P34	Ec 4-2	7.263	①	←P33	6・7	—
	P35	Ec 4-2	7.284	①	←P36	6・7	3・4
	P36	Ec 4-2	6.992	①	→2号土坑・P35。中世の越前焼出土。	6	—
	P37	Ec 5-2	7.370	①		6・7	—
	P40	Ec 4-3	7.125	①		6・7	3
	P41	Ec 4-3	7.430	①		6・7	3
	P42	Ec 4-3	6.989	①	ピット底に栗石1点。P84→P42→4号土坑。16世紀後半の越前擂鉢(No3)と近世陶器出土。	6・7	3
	P43	Ec 4-3	7.063	①	←P84	6・7	—
	P44	Ec 4-4	7.180	①		6・8	3
	P45	Ec 4-4	6.964	撹乱底		6・8	—
	P46	Ec 5-4	7.345	撹乱底		6・8	3
	P47	Ec 5-4	7.031	撹乱底		6・8	—
	P48	Ec 5-3	7.045	撹乱底		6・8	3
	P49	Ec 5-3	7.043	撹乱底		6・8	3

調査地点	遺構名	グリッド	底面標高(m)	確認面	特徴,その他(明らかな重複関係を旧→新と表記)	挿図	図版
20-1	P 50	Ec 5-4	6.993	攪乱底	ピット底に栗石1点。	6・8	—
	P 51	Ec 5-4	6.990	攪乱底		6・8	—
	P 52	Fc 1-4	6.966	①		6・8	3
	P 53	Fc 1-1	6.994	攪乱底		6・8	3
	P 54	Fb 2-5	6.895	攪乱底	ピット底に平らな礎盤石(石面標高6.98m),中央に柱根？が据えられたような状態で出土。脇に栗石1点。	6・8	4
	P 55	Fc 2-1	6.905	攪乱底	柱の入る間を残して栗石充填。	6・8	4
	P 56	Fc 2-1	7.210	①	←P89	6・8	4
	P 57	Fc 1-1	6.750	攪乱底	北半下部に栗石,中位と南半下部木材片(No６～８)を充填。	6・8	4
	P 58	Fc 2-2	7.400	①		6・8	—
	P 59	Fc 1-2	7.425	①		6・8	4
	P 61	Fc 2-2	7.423	①		6・8	—
	P 62	Fc 1-3	7.437	①		6・8	4
	P 63	Fc 1-4	6.945	①	柱の入る間を残して栗石充填。	6・8	4
	P 64	Fc 2-4	7.138	①		6・8	—
	P 65	Fc 2-4	7.324	①		6・8	4
	P 66	Fc 2-4	7.374	①	ピット底に平らな礎盤石(石面標高7.51m)。	6・8	4
	P 67	Fc 2-4	7.303	①	19世紀(～幕末)の灰釉陶器端反碗出土。	6・8	4
	1号掘立柱建物	Ec		①	主体２間×２間+付属１間,軸西偏85度,主体桁行間隔2.5m。	10	—
	(P 77)	Ec 3-1	6.942	②	ピット上位に平らな石(礎盤石？石面標高7.288m)。→P19	10	4
	(P 78)	Ec 3-2	6.789	攪乱底	打ち込み杭跡か？→P29	10	4
	(P 79)	Ec 3-3	7.060	攪乱底	打ち込み杭跡か？	10	4
	(P 80)	Ec 4-1	6.998	②	ピット中位に平らな礎盤石(石面標高7.198m)。	10	4
	(P 81)	Ec 3-2	6.901	攪乱底	柱の入る間を残して栗石充填。→P31,黒瓦出土。	10	4
	(P 82)	Ec 3-3	7.180	攪乱底	柱根出土(No10)。	10	4
	(P 83)	Ec 5-2	6.838	①	ピット底に平らな礎盤石(石面標高6.84m)上に柱根(No9)が据えられた状態,隙間に栗石充填。15世紀の瀬戸美濃天目茶碗出土。	10	5
	(P 88)	Ec 5-4	6.961	②	ピット底に平らな礎盤石(石面標高7.13m)。→4号溝	10	5
	(P 93)	Fc 1-4	7.224	攪乱底	柱の入る間を残して栗石充填。←P92	10	5
	P 71	Eb 3-5	7.011	②	P72→P71→P2	10	—
	P 72	Eb 3-5	6.955	②	ピット底に平らな礎盤石(石面標高7.04m),礎盤石上に黒平瓦片敷。→P71。17世紀初頭の中国染付と近世の唐津焼,黒瓦,鉄釘類出土。	10	5
	P 73	Eb 3-5	7.200	②		10	—
	P 74	Ec 3-1	7.278	②	→P16	10	5
	P 75	Ec 4-1	7.128	②		10	5

調査地点	遺構名	グリッド	底面標高(m)	確認面	特徴,その他(明らかな重複関係を旧→新と表記)	挿図	図版
20-1	P 76	Ec 4-1	7.295	②	→P11	10	—
	P 84	Ec 4-3	6.922	②	柱の入る間を残して栗石充填。→4号土坑・P42・P43	7・10	5
	P 85	Ec 5-3	7.093	②		10・11	5
	P 86	Ec 5-3	7.299	②	→P87。古代の土師器出土。	10・11	5
	P 87	Ec 5-3	6.970	②	←P86。柱根,古代の土師器出土。	10・11	5
	P 89	Fc 2-1	7.006	②	ピット底中央に,上面斜めな石(礎盤石？,石面標高7.16m)。→P56	10・11	5
	P 90	Fc 2-3	6.921	②	P 98→P 90→P91。柱根,19世紀(～幕末)近世陶器出土。	10・11	5
	P 91	Fc 2-3	7.034	②	柱の入る隙間を残して割石充填。←P90	10・11	5
	P 92	Fc 1-4	6.973	攪乱底	→P 93。黒瓦出土。	10・11	5
	P 94	Fc 1-4	7.067	②		10・11	—
	P 95	Fc 2-4	7.139	②		10・11	—
	P 96	Fc 2-4	7.038	②		10・11	—
	P 97	Fc 2-4	7.244	②		10・11	5
	P 98	Fc 2-3	—	④	→P 90	12	—
20-2	13号土坑	Cc 4・5-2	7.112	—	近世陶器出土。	13	6
	14号土坑	Cc 5-2, Dc 1-2	7.044	—	古代の土師器・須恵器と16世紀前半の瀬戸美濃小皿出土。	13	—
	15号土坑	Dc 5-5, Dd 5-1	7.403	—	→P116。古代の土師器・須恵器を出土。	14	6
	P 101	Cc 4・5-1	7.085	—	→P103	13	6
	P 102	Cc 4-1	7.223	—	→P103	13	—
	P 103	Cc 4・5-1	7.169	—	近世陶器碗と黒丸瓦出土(No12・13)。←P101・102	13	6
	P 104	Dc 1-1・2	7.075	—	近世陶器出土。	13	—
	P 105	Cc 4・5-2	7.192	—		13	—
	P 106	Cc 4-3		—		13	—
	P 107	Dc 1-4	7.066	—	13世紀後葉～14世紀中葉の珠洲片口鉢(No14)と近世陶器出土。	13	—
	P 108	Cc4-4・5, Dc1-4・5	7.175	—		13	6
	P 109	Dc 5-2	6.983	—		13	—
	P 110	Dc 5-3	6.992	—		14	6
	P 111	Dc 5-4・5	7.080	—		14	—
	P 112	Dc 5-5	7.000	—		14	6
	P 113	Dc 5-5	7.206	—		14	—
	P 114	Dc 5-5	7.348	—		14	—
	P 115	Dc4・5-5, Dd 4・5-1	7.322	—		14	—
	P 116	Dd 5-1	7.202	—	←15号土坑。15世紀前半の瀬戸美濃天目茶碗出土。	14	6
	P 117	Dd 5-1	7.181	—	ピット底に平らな礎盤石(石面標高7.34m)。	14	6
	P 118	Dd 5-1	7.420	—		14	—

表３　遺物一覧表

番号	調査地点	グリッド	土層・遺構	種　類	器　種	法量(cm)（　）書きは遺存部分 口径	底径	器高	技法・文様・その他	遺　存	生産地	挿図	図版
1	20-1	Ec3-3	P39	陶器	皿(折縁皿)	—	5.0	(2.0)	ロクロ成形,灰釉,内面輪状に釉剥ぎ,削り出し高台,高台内に輪ドチの癒着痕あり。	1/3	瀬戸・美濃	9	7
2	20-1	Fc1-2	P60 -1層	陶器	皿(丸皿)	11.1	4.2	3.15	ロクロ成形,灰釉,高台脇削り,高台無釉,見込みに胎土目痕。外底部に煤付着	1/2	肥前	9	7
3	20-1	Ec4-3	P42 -1層	中世陶器	擂鉢	30.8	13.2	11.6	擂目９条1単位,焼成やや柔。口縁・底面磨耗顕著,内面・割れ口に炭化物付着(二次的)	1/4	越前	9	7
4	20-1	Ec5-1	P14	加工木材(建築部材？)		径16.9～12.7		長さ(35.6)	芯持ち材。断面形楕円の材の全面を面取りし、下端側面を全周する形で溝を彫ってある。溝の深さは材の表裏で意図的に違えてある。柱への転用？ピット内に縦に据え置き。	加工材片端	樹種同定:クリ	9	7
5	20-1	Ec3-1	P17	杭		直径 8.0	—	長さ(34.2)	丸木材,先端を削って尖らせている。打ち込み。	加工材先端のみ	樹種同定:アカマツ	9	7・9
6	20-1	Ec1-1	P57	杭(建築部材？)		直径 8.8	8.1	長さ(18.0)	丸木材,片端を削って尖らせ,片端は平に切断。ピット中位に横たわった状態で出土。	先端を欠損	樹種同定:クリ	9	7・9
7	20-1	Ec1-1	P57	加工板材(桶底破片)		幅(15.5)	厚さ 2.1	長さ 11.3	板目材,半円形に加工,ピット内から木片とともに出土。	両端を欠損	樹種同定:アカマツ	9	7

番号	調査地点	グリッド	土層・遺構	種類	器種	法量（cm）（ ）書きは遺存部分 口径	底径	器高	技法・文様・その他	遺存	生産地	挿図	図版
8	20-1	Ec1-1	P57	加工木材(建築部材)		直径 10.4	—	長さ 11.7	丸木材,両端を平に切断。側面２方向にホゾ穴あり。両切断面と側面の一部に、加圧によるものと見られる付着物あり。ピット底から木片とともに出土。	ほぼ完形	樹種同定:スギ	9	7
9	20-1	Ec5-2	P83	柱根		直径26.3～25.5		長さ (30.8)	丸木材,底面に伐採痕をそのまま残す。側面一部面取り。L字状に貫通する加工痕あり。柱穴内への据え置き。	底面付近のみ	樹種同定:クリ	11	7
10	20-1	Ec3-3	P82	柱根		直径21.0～24.6		長さ (26.0)	丸木材,劣化のため,観察不能。底面に加圧によるものと見られる付着物あり。柱穴内への据え置き	底面付近のみ	樹種同定:クリ	11	7・9
11	20-1	Eb3-5	Ⅳ層	石製品	砥石(仕上砥)	(11.5)	(3.4)	(3.2)	石材:凝灰石。磨面４面,欠損部を再度磨面として使用			12	—
12	20-2	Cc5-1 Dc1-3 Dc3-3	P103 乱30 乱10	陶器	碗	10.0	2.8	4.9	ロクロ成形,灰釉,高台無釉	1/3		15	7
13	20-2	Cc4-1	P103	瓦	黒丸瓦	—	—	—	外面に「大坂瓦司中山市郎右衛門」の刻印あり	破片		15	7
14	20-1	Dc1-4	P107	中世炻器	片口鉢	—	—	—	擂目12条1単位,焼成良好。内面割れ口に炭化物付着(二次的)。内面磨耗。	破片	珠洲	15	7
15	20-2	Dc2-5	Ⅰc層	磁器	碗	—	3.2	(3.2)	ロクロ成形,染付,畳付無釉,内外面「二重網目文」,見込みコンニャク印判「円圃＋菊花文」	1/3	肥前	15	7
16	20-2	排土		磁器	碗	10.0	—	(3.5)	ロクロ成形,染付,内面「網目文」,外面「二重網目文」	1/6	肥前波佐見	15	7
17	20-2	Dc4-1	Ⅰc層	磁器	碗(厚手碗)	—	—	(4.8)	ロクロ成形,染付,外面「梅樹文」,高台裏銘有,見込みに目痕1	破片	肥前波佐見	15	7
18	20-2	Dc1-1	乱2	磁器	碗	11.4	5.8	7.3	ロクロ成形,染付,外面「山水文」,高台畳付無釉	1/3	不明	15	7
19	20-2	Dc3-5	乱22	磁器	皿(小皿)	12.0	4.2	3.4	ロクロ成形,染付,畳付無釉,内面「二重斜格子文」,厚手,見込み蛇ノ目釉剥ぎ砂付着	2/3	肥前波佐見	15	7
20	20-2	5トレンチ	乱	磁器	段重	13.4	高台径 12.0	4.7	ロクロ成形,染付,外面「丸文・草花文」,口縁・高台脇釉剥ぎ	1/3	肥前	15	7
21	20-2	Dc3-3	Ⅰc層	磁器	香炉	5.0	—	(2.9)	ロクロ成形,青磁,内面大半無釉	1/6	肥前	15	7
22	20-2	Dc3-2	乱13	陶器	碗(天目茶碗)	11.6	—	(4.4)	ロクロ成形,鉄釉	1/6	瀬戸・美濃	15	7
23	20-2	Dd4-1	乱	陶器	碗	—	5.2	(3.6)	ロクロ成形,灰釉,白泥文様(三島手),見込み印花象嵌,内外面刷毛目,高台内も施釉,畳付に砂目痕,高台脇削り	全周	肥前唐津	15	8
24	20-2	Dd5-4	乱	陶器	碗	—	4.6	(3.3)	ロクロ成形,灰釉,高台無釉,見込み鉄絵,高台脇削り	2/3	肥前唐津	15	8
25	20-2	Cc4-3	乱30	陶器	碗	9.6	3.3	4.7	ロクロ成形,灰釉,高台無釉,見込みに目痕(3)。割れ口に黒色付着物あり。(漆継ぎ？二次的付着)	ほぼ完形		15	8
26	20-2	Cc4-3	乱30	陶器	碗	9.1	3.7	4.7	ロクロ成形,藁灰釉,高台無釉	1/2		15	8
27	20-2	Cc3-3	乱10	陶器	碗(端反碗)	9.0	—	(4.3)	ロクロ成形,灰釉,口縁部内外面緑釉,高台部無釉,見込みに目痕	1/4	京都・信楽	15	8
28	20-2	Cc4-3	乱30	陶器	碗(端反碗)	9.2	3.6	4.9	ロクロ成形,灰釉,高台畳付無釉,内面白土掛け,外面白土・鉄絵「梅花枝文」	1/3	瀬戸・美濃	15	8
29	20-2	Dc3-3	Ⅰc層	陶器	皿	—	—	(5.35)	ロクロ成形,灰釉,鉄絵	1/12	肥前唐津	15	8
30	20-2	Dc2-3 Dc2-2	Ⅰc層 乱3	陶器	皿	—	—	(4.6)	ロクロ成形,灰釉,鉄絵	破片	肥前唐津	15	8
31	20-2	Dc1-1	乱3	陶器	擂鉢	33.0	—	(3.5)	内外面鉄釉,内面の擂目上端を撫で揃える	1/10	肥前	15	8
32	20-2	Dc2-1 Dc2-2 Cc4-2	Ⅰc層 乱3 乱	陶器	擂鉢	28.0	—	(4.6)	ロクロ成形,鉄釉,外面口縁部以下無釉	1/8		15	8
33	20-2	Dc1-1	Ⅰc層	陶器	擂鉢	—	—	—	口縁部下端に突帯がめぐり,断面三角状を呈す。口縁部沈線めぐる(内1条,外2条)。無釉,焼しめ	破片	不明	15	8
34	20-2	Dc2-1	乱3	陶器	燈明皿	11.1	5.0	2.3	ロクロ成形,内外面鉄化粧,口縁外面強く撫で。口縁内外面炭化物の付着顕著(油煙痕)	1/5	不明	15	8
35	20-2	Dd5-4	乱	陶器	皿(小皿)	13.0	6.5	2.55	ロクロ成形,灰釉,外面下半～底部無釉,底部糸切り,見込みに胎土目痕	破片	肥前唐津	15	8
36	20-2	Dc5-4	Ⅰc層	陶器	茶入れ	—	3.2	(2.0)	ロクロ成形,鉄釉(浸け掛け),外面下半～底部無釉,底部回転糸切り	全周	瀬戸	15	8
37	20-2	Dc3-3	乱10	瓦質土器	火鉢	—	—	(9.7)	ロクロ成形,内外面黒色処理,外面櫛歯文後,ミガキ,貼付け有孔把手(獅子頭形)。	破片		15	8
38	20-2	Dc3-2	Ⅰc層	瓦	黒平瓦	—	—	厚2.2	小口に「～中山市郎右衛門」の刻印あり	破片		16	—
39	20-2	Cc4-1	Ⅰc層	瓦	黒平瓦	—	—	厚2.2	小口に「大坂瓦司中山市郎右衛門」の刻印あり	破片		16	—
40	20-2	Dc4-2	Ⅰc層	瓦	黒平瓦	—	—	厚2.2	小口に「大坂瓦司中山市郎右衛門」の刻印あり	破片		16	—
41	20-2	Dc2-3	Ⅰc層	瓦	黒平瓦	—	—	厚2.2	小口に「大坂瓦司中山市郎右衛門」の刻印あり	破片		16	—
42	20-2	Cc5-3	乱	銭	寛永通寶	径2.44	孔0.46	厚0.09	古寛永(銅一文銭),表面「寛永通寶」(ス貝寛),背面無文,重量1.8ｇ	縁欠損		16	8
43	20-2	Cc5-3	乱	銭	寛永通寶	径2.37	孔0.7	厚0.08	新寛永(銅一文銭),表面「寛永通寶」(ハ貝寛),背面無文,重量2.6ｇ	縁欠損		16	8
44	20-2	Cc5-3	乱	銭	寛永通寶	径2.32	孔0.6	厚0.09	新寛永(銅一文銭),表面「寛永通寶」(ハ貝寛),背面無文,重量3.2ｇ	完形		16	8
45	20-2	Dc4-2	乱13	須恵器	杯(無台杯)	12.2	9.2	3.3	ロクロ成形,底部回転ヘラ切り。焼成不良(酸化炎焼成)の須恵器,胎土比較的精良,大粒の砂粒少量含む。(いわゆる胎土A群)	破片	在地産	16	—
46	20-2	Dc2-1	Ⅱ層	陶器	碗(端反碗)	9.0	—	(4.4)	ロクロ成形,灰釉,高台無釉	1/6		16	—
47	20-2	Dc2-1	Ⅱ層 乱3	陶器	土瓶蓋	9.0	受部径 6.6	(2.1)	ロクロ成形,外面鉄釉,内面無釉	1/2		16	8
①	20-1	4トレンチ	P83 P83-3層	陶器	碗(天目茶碗)	—	—	—	ロクロ成形,黒釉	破片	瀬戸・美濃	—	7
②	20-2	Cd4-1	乱	陶器	碗(開口碗)	—	—	(3.0)	ロクロ成形,藁灰釉	破片	萩	—	8

４．加工材の樹種

吉川純子（古代の森研究舎）

１．はじめに

新発田市中心部に位置する新発田城は江戸時代に数回の火災，再建を経た後明治の廃城令で大半が破却された。新発田城跡第20地点では，近世以降の柱穴から検出された柱根，加工木材や打ち込み杭，計7点の樹種同定を行った。試料からは剃刀で横断面，接線断面，放射断面の3方向の切片を切り取り，ガムクロラールで封入しプレパラートを作製した。

２．同定結果と考察

同定結果を表４・図版９に示す。桶材と杭にはアカマツ，建築部材にはスギとクリが使われていた。以下に同定された樹種の木材解剖学的記載を行う。

表４　加工材の樹種

遺物No	出土遺構	種　別	出土状態	分類群	遺物No	出土遺構	種　別	出土状態	分類群
4	P14	加工木材	ピット内に据え置き	クリ	8	P57	加工木材	ピット内に充填(廃棄？)	クリ
5	P17	杭	打ち込み	アカマツ	9	P83	柱根	ピット内に据え置き	クリ
6	P57	杭	ピット内に充填(廃棄？)	スギ	10	P82	柱根	ピット内に据え置き	クリ
7	P57	桶底	ピット内に充填(廃棄？)	アカマツ					

スギ(*Cryptomeria japonica* (Linn.fil.)D.Don)：早材から晩材への移行は急で晩材部が厚く，晩材部はじめに樹脂細胞が接線方向に並ぶ。放射細胞はすべて柔細胞から成り，分野壁孔はスギ型で横に長い楕円形となり，1分野に2～3個ある。

アカマツ(*Pinus densiflora* Sieb. et. Zucc.)：早材から晩材への移行は急で晩材部が厚く，大きな垂直樹脂道がある。放射組織は放射仮道管をもち，内壁が鋸歯状にはげしく突出している。放射柔細胞の分野壁孔は窓型で，接線断面では水平樹脂道が見られる。

クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：年輪の最初に大きな道管が2，3列配列し，その後急に径を減じて小さな道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で，道管内にはチロースが発達する。放射組織は単列ないし2列で同性である。

加工木材には廃棄された桶材があり，アカマツが使われていた。アカマツは土木材などに利用されることが多いが，北陸の石川県桜町遺跡や御館遺跡では鎌倉時代に漆器などの容器として出土した例があり(山田1993)，新発田市加治天王前遺跡の13～15世紀でも桶材としてマツ属複維管束亜属が検出されていることから(吉川2008)，近世においても引き続き桶材として利用していたと考えられる。スギは全国で建築部材として多用されており，耐久性・保存性が高い。クリは耐久性が強く土木材として広く利用されている。

＜引用文献＞

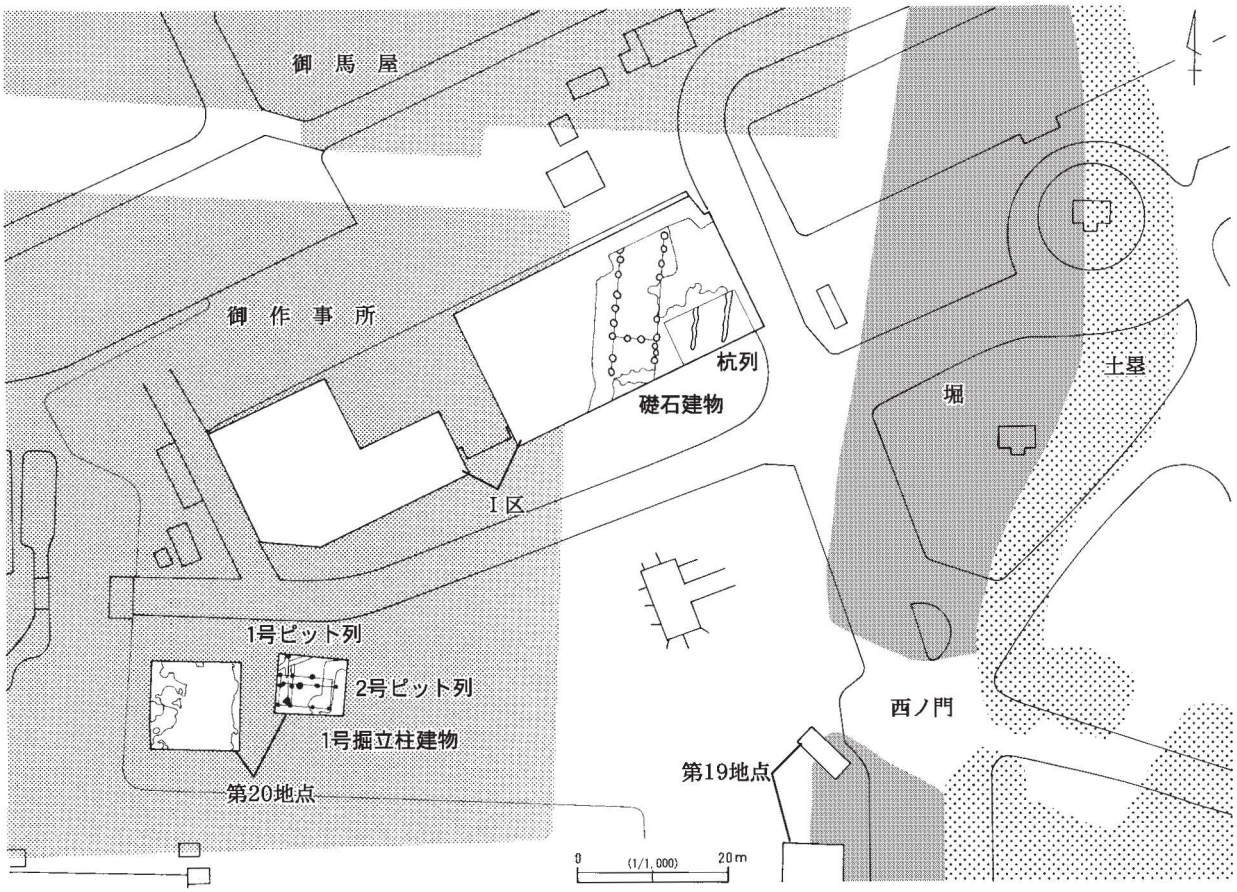
山田昌久．1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」植生史研究特別第1号．植生史研究会．1-244.

吉川純子．2008「加工材および木製品の樹種」『加治天王前遺跡 発掘調査報告書』新発田市教育委員会．78-79.

Ⅳ章　まとめ

今回調査した第20地点は，西ノ門（西川門）西側の城外に位置し，江戸時代に入ってから城下の藩士屋敷地として整備され，19世紀には藩施設「御作事所」の敷地となった場所である。調査により19世紀代(～幕末)のピット多数を検出したが，配置を確認できたのは１号掘立柱建物と１・２号ピット列のみである。遺物は少なく，詳細な時期・性格を判断できる資料に恵まれなかったが，過去にⅠ区調査（田中1987）で検出した礎石建物や杭列と同様に御作事所の区画と方向的と一致するため，これに関連する構築物を想定している（第17図）。

江戸時代，建物の柱間寸法は全国的に6尺～6尺5寸（1.8～2.0㎝）に規格化されてくる傾向にある。過去の新発田城の調査においても，江戸時代と認識した建物は３棟のみながら（Ⅰ区・Ⅲ区・第10地点で各１棟），いずれも柱間1.9m前後である。これ対し，１号掘立柱建物の柱間は2.5mと長く，1号ピット列は3.1m，２号ピット列も2.4mある。また，江戸時代に入ると建物の主流が，掘立柱建物から礎石建物へと移行して行くのに対し，これらは掘立柱であるなど，建物の一般的傾向と合致しない。しかし，仙台城武家屋敷の調査（藤沢ほか2000）などにおいて，少数だが柱間7尺・8尺の柱穴列が検出されており，小規模な建物や建物以外の構築物では19世紀に至るまで掘立柱が使用されていたことが確認できる。本地点においてもおそらく，主要建物があったとすれば礎石建物だが，近代以降の撹乱を受けて失われ，掘り込みの深い掘立柱穴のみの検出となったものであろう。ただし，Ⅰ区の礎石建物と検出標高を比較すると，礎石建物の基礎下部が標高7.3～7.4mであるのに対し，今回の遺構確認面①は標高7.45～7.5m，確認面②は7.35m前後であり，遺構が同じ高さにあったと仮定するならばぎりぎり残存することになるため，調査範囲にはそもそも主要建物が存在しなかった可能性も考えられる。



第17図　第20地点と御作事所

なお，今回は狭い範囲での調査であり，撹乱で失われた部分も多く，これら構築物の性格を明らかにするような資料には恵まれなかったが，今後周辺の調査が進み，データーが蓄積されるのを待って，改めて検討したい。検討に当たっては，組織としての「御作事所」の把握が必要となろう。一般的に，御作事所は城内や藩主別邸等，藩の建築事業を管轄しており，藩によっては作事奉行のもと，配下に大工等の職人や城普請等数十名を恒常的に雇用し，建築・補修に関する設計から施工までをも引き受けるなどの例もある（和田1998）。しかし，新発田藩の藩組織における「御作事所」の職務内容については不明な部分が見受けられる。新発田藩の家臣団構成について確認できる三史料（『御配当帳・御扶持方帳』（宝暦8年：1758），『新発田御家御役人名前留帳』（享和元年：1801），『新発田藩武鑑』（安政3年：1856），新発田市史編纂委員会1965）を見ると，普請奉行職はあるが，作事奉行職は確認できず，「作事方」は扶持人（下級役人）5～8名で構成されていることがわかる。類似する業務を担当する役人に，「小普請方」（建物の修理・営繕を担当か）や「掛蔵方」（三ノ丸掛蔵に所在した小細工所（各種生活用具の作成・修理等）を担当か）がおり，作事方と同格程度の扶持人の中から数名づつが任じられているが，『新発田藩武鑑』には，作事方の配下として手代・付人のみ記載されているのに対し，「掛倉諸職人」として大工以下ほぼ全ての職人種が網羅されている。このことは，新発田藩では作事方と掛蔵方との間で，事務と実務監督などの職務分担が行われていた可能性を示唆し，『一歩一間歩詰惣絵図』（天保11年頃：1840)に描かれた，城外の「御作事所」と，三ノ丸の「掛蔵御役所」の，場の使い分けにも発展する問題を含む，今後の重要な検討課題である。

＜引用・参考文献＞

伊藤喜代子ほか　2008　『新発田城跡発掘調査報告書Ⅴ(第19地点）』新発田市教育委員会

江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

大橋康二　1987　「16・17世紀における日本出土の中国磁器について」『東アジアの考古と歴史　下』同朋舎

春日真実ほか　2004　『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会（三条市）

金子健一ほか　2004　『財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター企画展　江戸時代の瀬戸・美濃窯』財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター

九州近世陶磁学会事務局　2000　『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会１０周年記念-』九州近世陶磁器学会(佐賀県西松浦郡)

新発田市史編纂委員会　1965　『新発田市史資料第２巻　新発田藩史料(２)藩臣篇』新発田市長・新発田市史刊行事務局

新発田市史編纂委員会　1980　『新発田市史』上・下巻　新発田市

嶋谷和彦　1996　「堺擂鉢の生産と流布」『考古学ジャーナル』409

水本和美　1998　「陶磁器・土器　分類・計数基準」『伝中・上富士前Ⅱ』別冊　豊島区遺跡調査会

鈴木　康ほか　1998　『城下町新発田400年のあゆみ』新発田市教育委員会・新発田市

高橋礼弥　2006　『新発田藩年代記』新発田藩年代記刊行委員会（新発田市）

田中耕作　1987　『新発田城跡発掘調査報告書(Ⅰ～Ⅲ区）』新発田市教育委員会

鶴巻康志ほか　1997　『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ(第7～10地点）』新発田市教育委員会

鶴巻康志ほか　2001　『新発田城跡発掘調査報告書Ⅲ(第11・12地点）』新発田市教育委員会

鶴巻康志　2004　『新発田城跡発掘調査報告書Ⅳ(第16地点）』新発田市教育委員会

永井久美男　1996　『日本出土銭総覧1996年版』兵庫埋蔵銭調査会（尼崎市）

楢崎彰一　1986　『開館１５周年記念　越前名陶展』福井県陶芸館

藤井恵介・玉井哲雄　1995　『建築の歴史』中央公論社

藤澤良祐　1993　「瀬戸大窯の時代」『瀬戸市史　陶磁史篇４』瀬戸市史編纂委員会・愛知県瀬戸市

藤澤良祐　1997　「中世瀬戸窯の動態」『研究紀要』第5輯，財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤良祐　2007　「第1章　総論」『愛知県史　別編　窯業2　中世・近世　瀬戸系』愛知県史編さん委員会

藤沢敦・関根達人・奈良佳子　2000　『東北大学埋蔵文化財調査年報13(仙台城二の丸跡第11地点の調査　仙台城二の丸北方武家屋敷跡第4地点の調査　青葉山遺跡Ｅ地点第4次調査）』東北大学埋蔵文化財調査研究センター

森　毅　1995　「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通―大坂の資料を中心に―」『ヒストリア』第149号,大阪歴史学会（吹田市）

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

和田嘉宥　1998　「松江藩御作事所の構成とその推移-松江藩御作事所と御大工の作事に関する研究　その１-」日本建築学会計画系論文集　第504号，社団法人　日本建築学会（港区）

遺構確認面①　遺構掘削作業

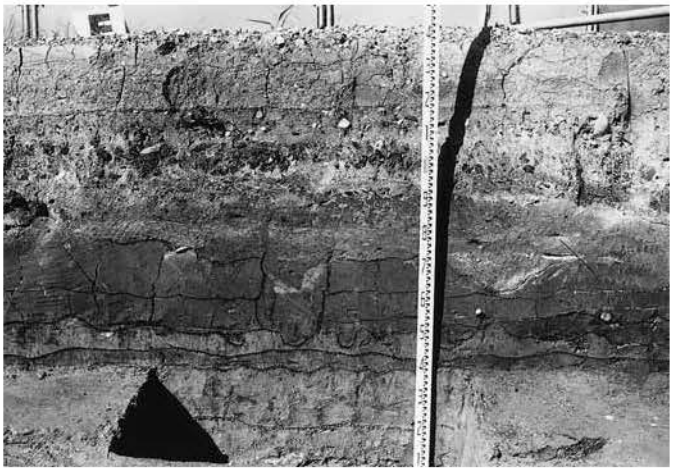
遺構確認面① 遺構完掘状況

Ⅱ層掘削作業（遺構確認面②検出）

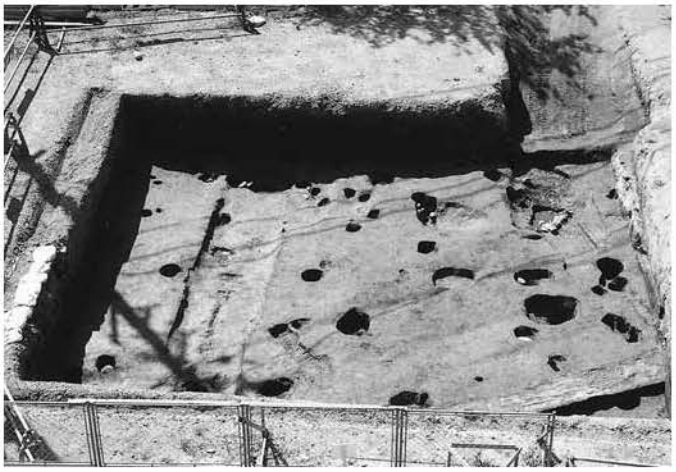
遺構確認面②　遺構完掘状況

遺構確認面③　確認面精査作業

遺構確認面③　遺構検出状況

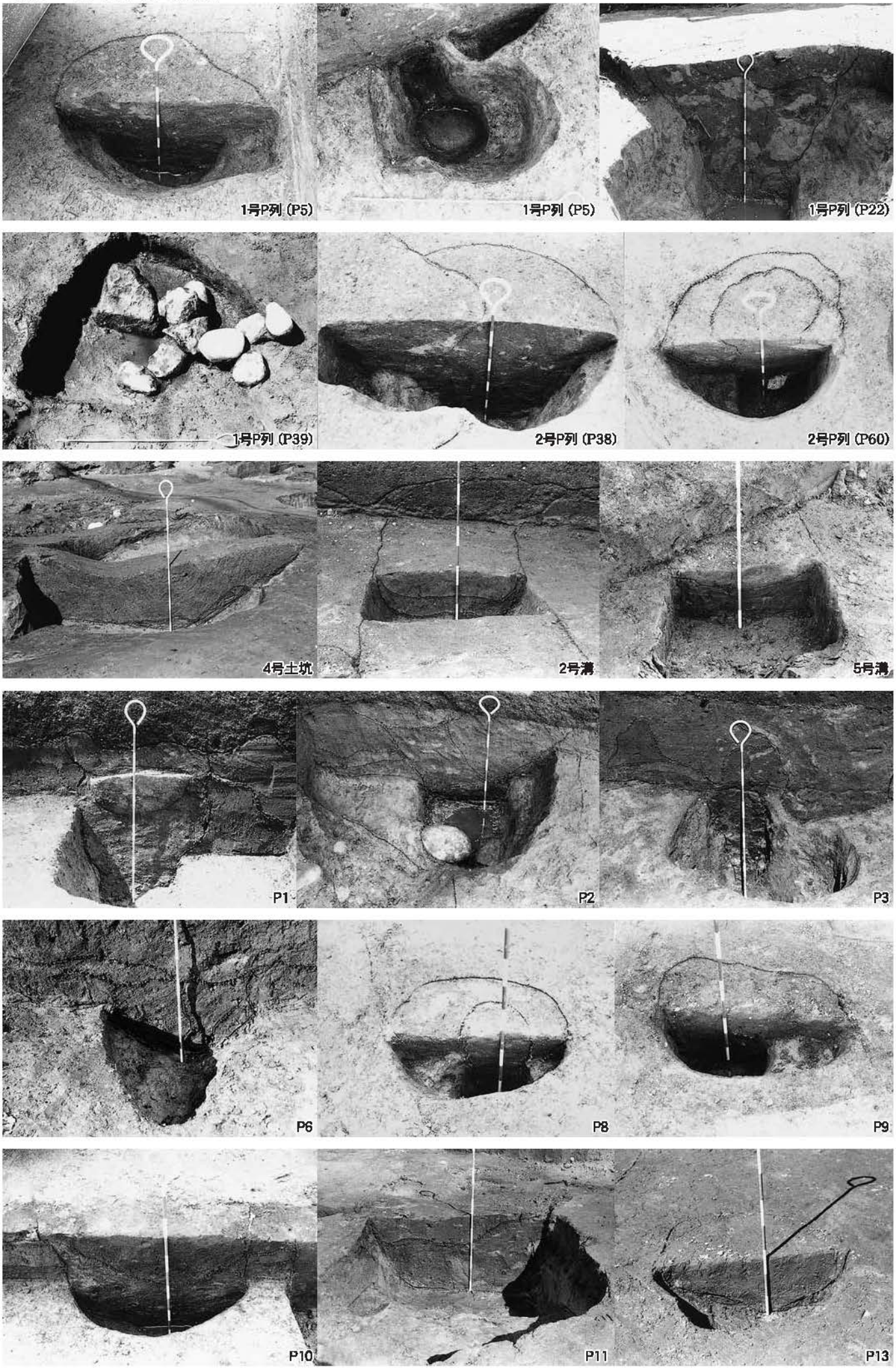


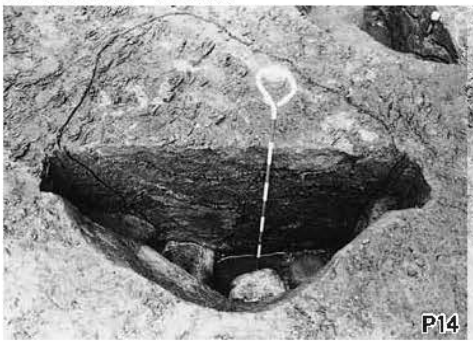
基本土層（Fc1-4グリッド南壁）



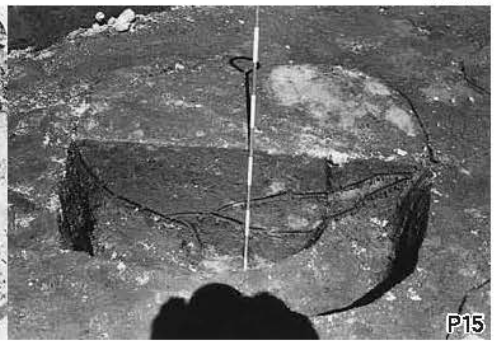
遺構確認面④　遺構完掘状況

図版2　第20-1地点　遺構(1)



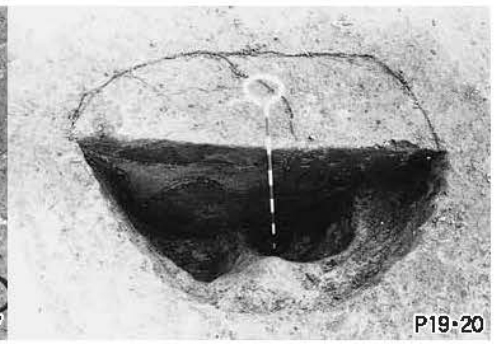

P14

P14

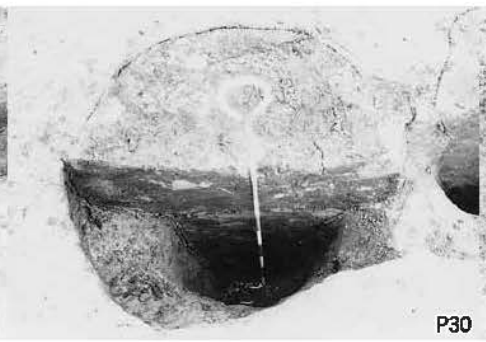

P15

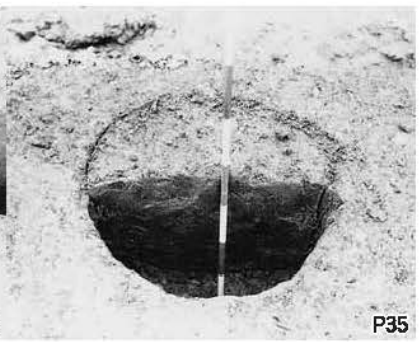
P16

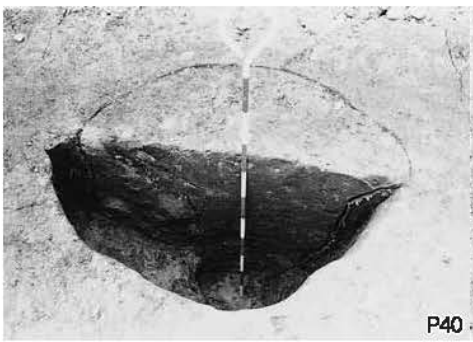
P16・17

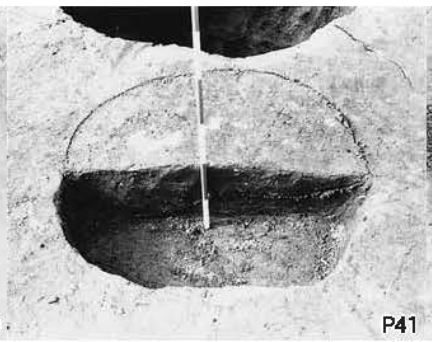

P19・20

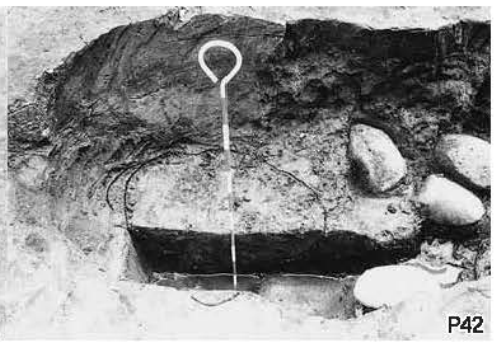
P21

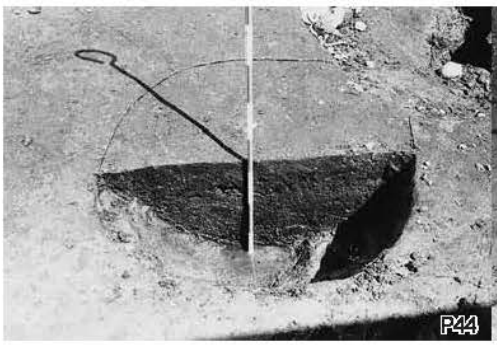

P30


P35

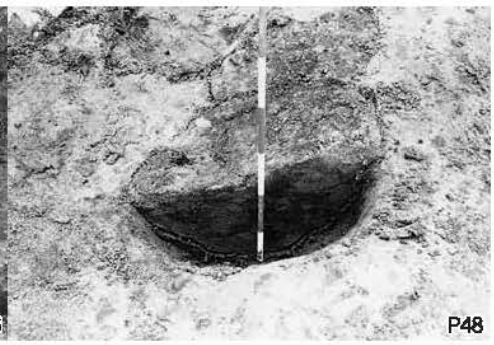

P40

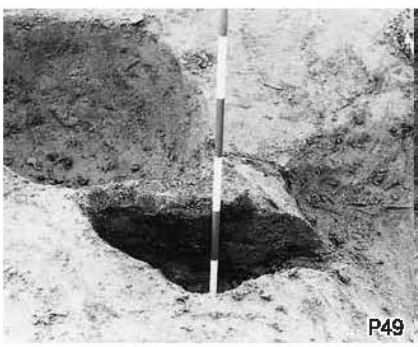

P41

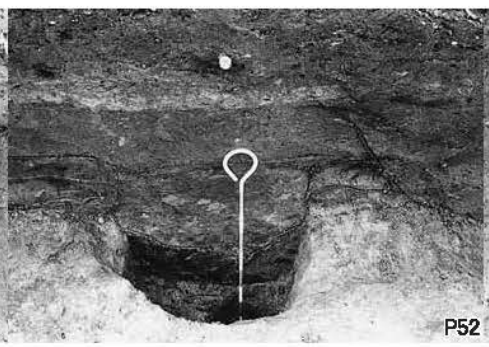

P42


P44

P46

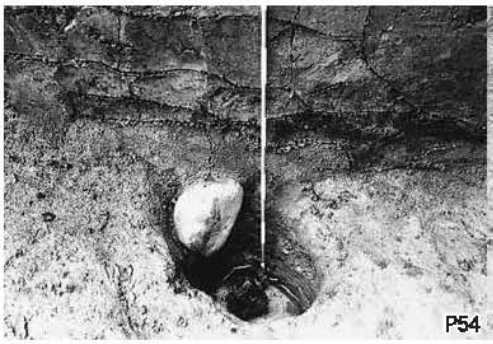

P48


P49

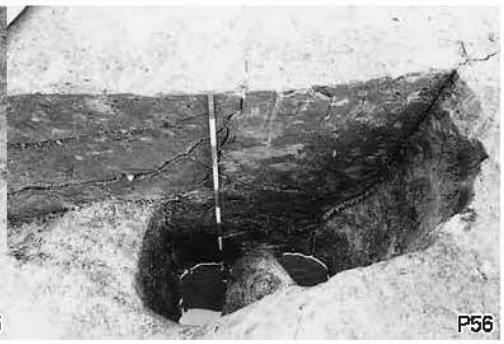

P52

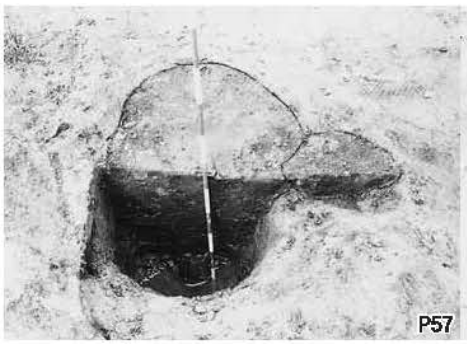
P53

図版4　第20-1地点　遺構(3)


P54

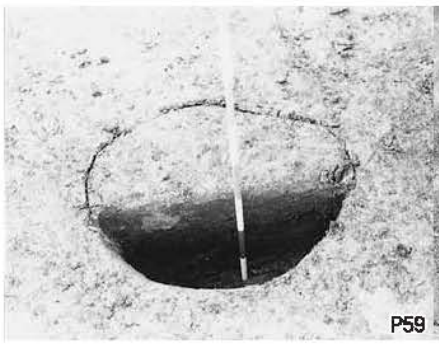
P55

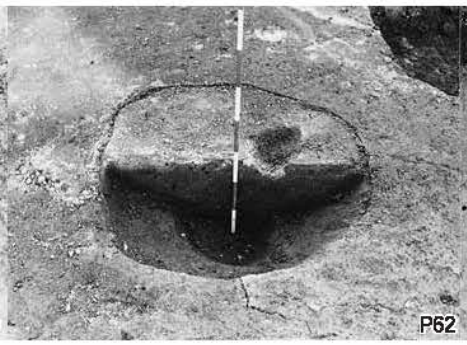

P56


P57

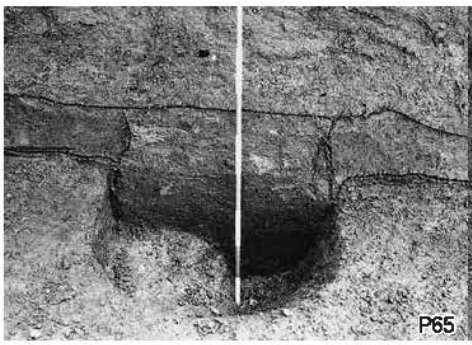
P57

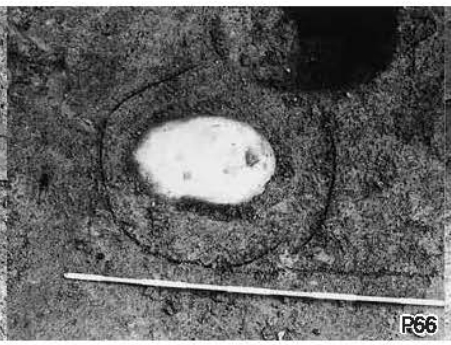
P57

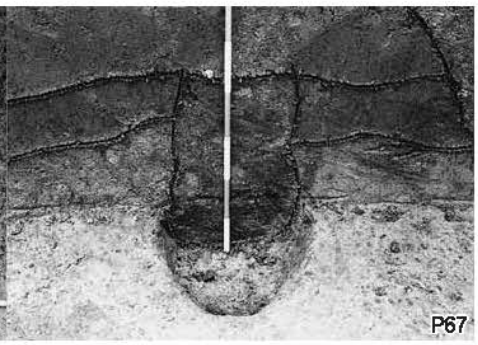

P59


P62

P63

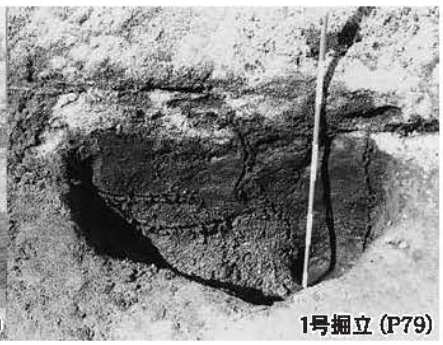

P65


P66


P67

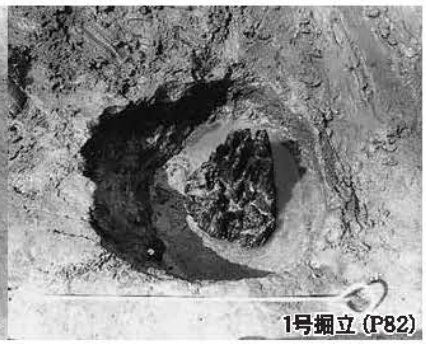
1号掘立 (P77), P19・20

1号掘立 (P78)

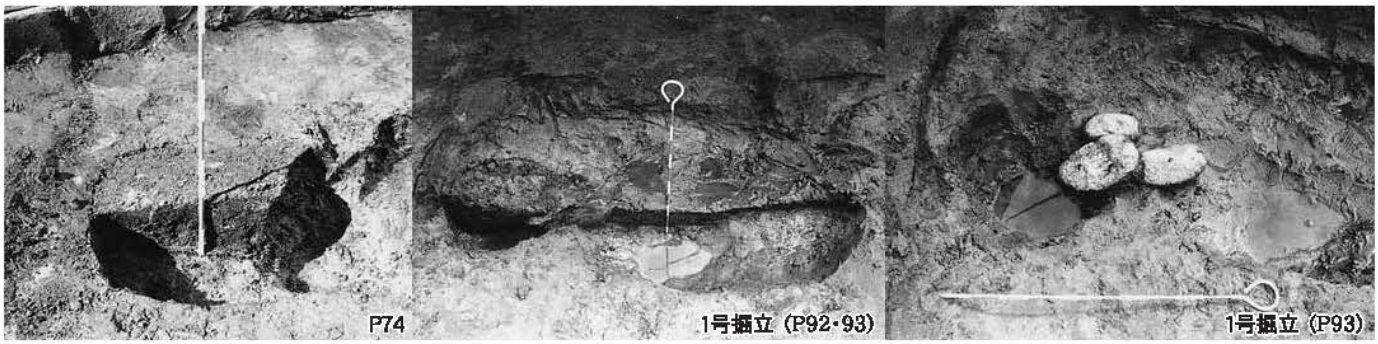

1号掘立 (P79)

1号掘立 (P80)

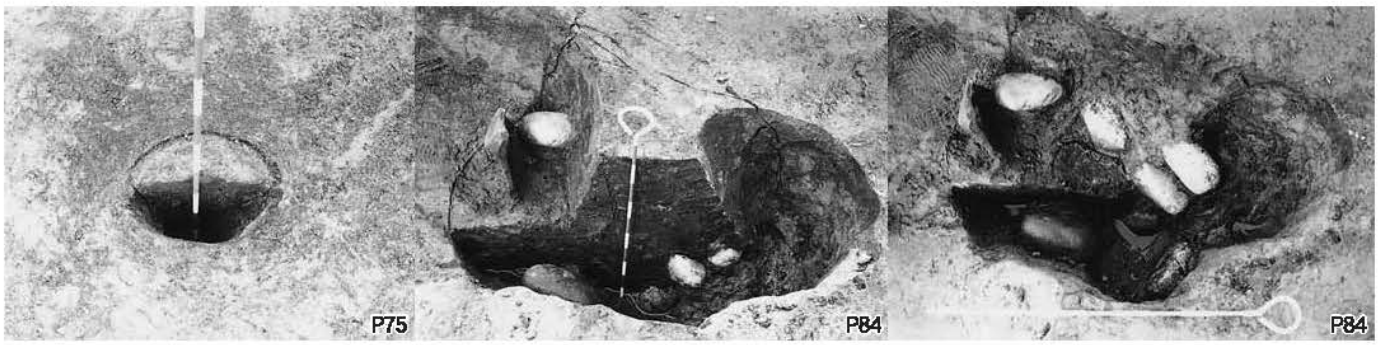
1号掘立 (P81)


1号掘立 (P82)

1号掘立（P83）
1号掘立（P83）
1号掘立（P88）


P74
1号掘立（P92・93）
1号掘立（P93）

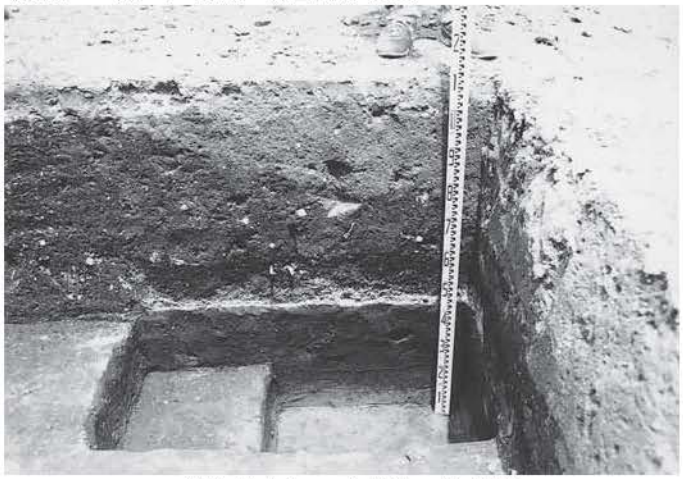
P72
P72
P72


P75
P84
P84

P85
P86・87
P89

P90
P91
P97

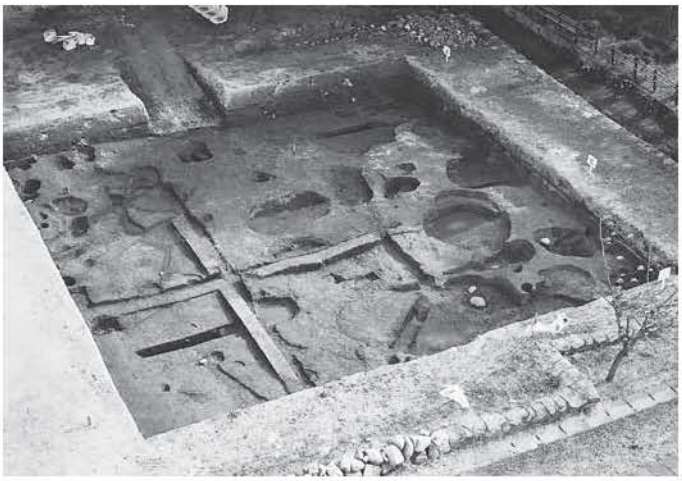
図版6　第20-2地点　調査風景・遺構



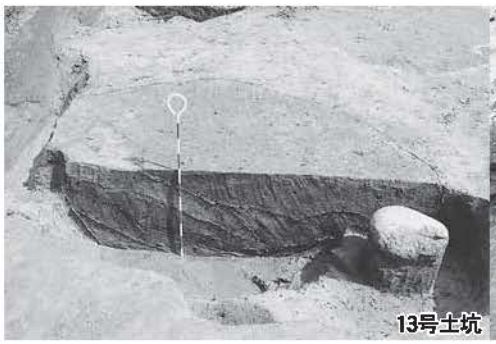
基本土層（Dc5-1 グリッド北壁）

遺構確認面精査作業

P104掘削作業

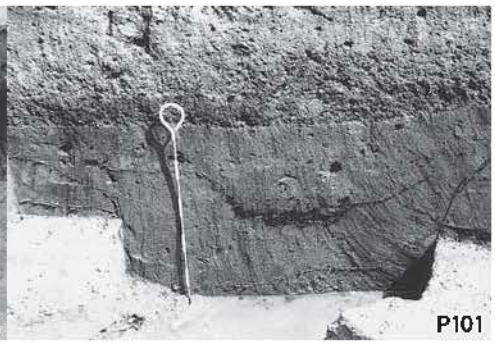


遺構完掘状況

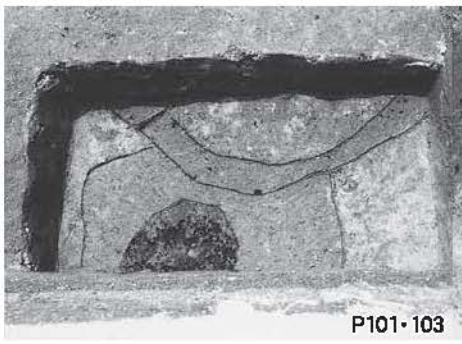


13号土坑

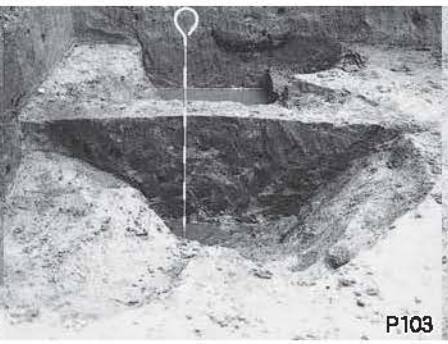
15号土坑



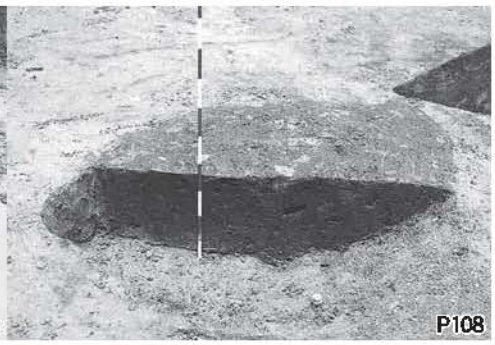
P101



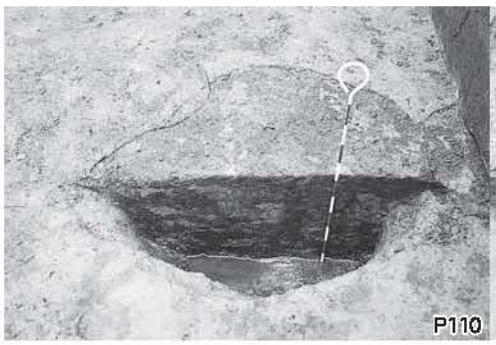
P101・103



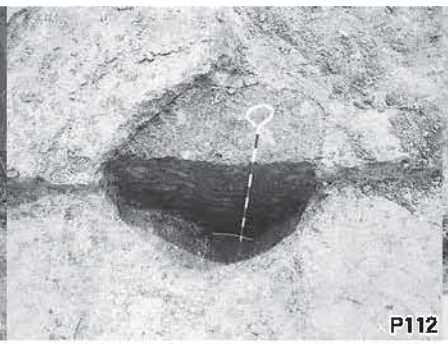
P103



P108



P110



P112

P116・117

1

2

①

3

4

5

6

7

8

9

12

10

13

14

15

16

17

18

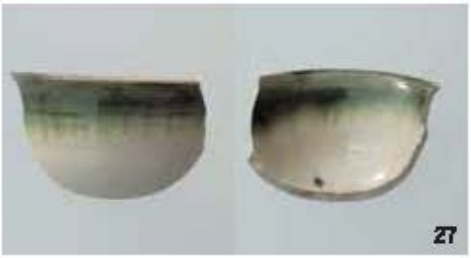
19

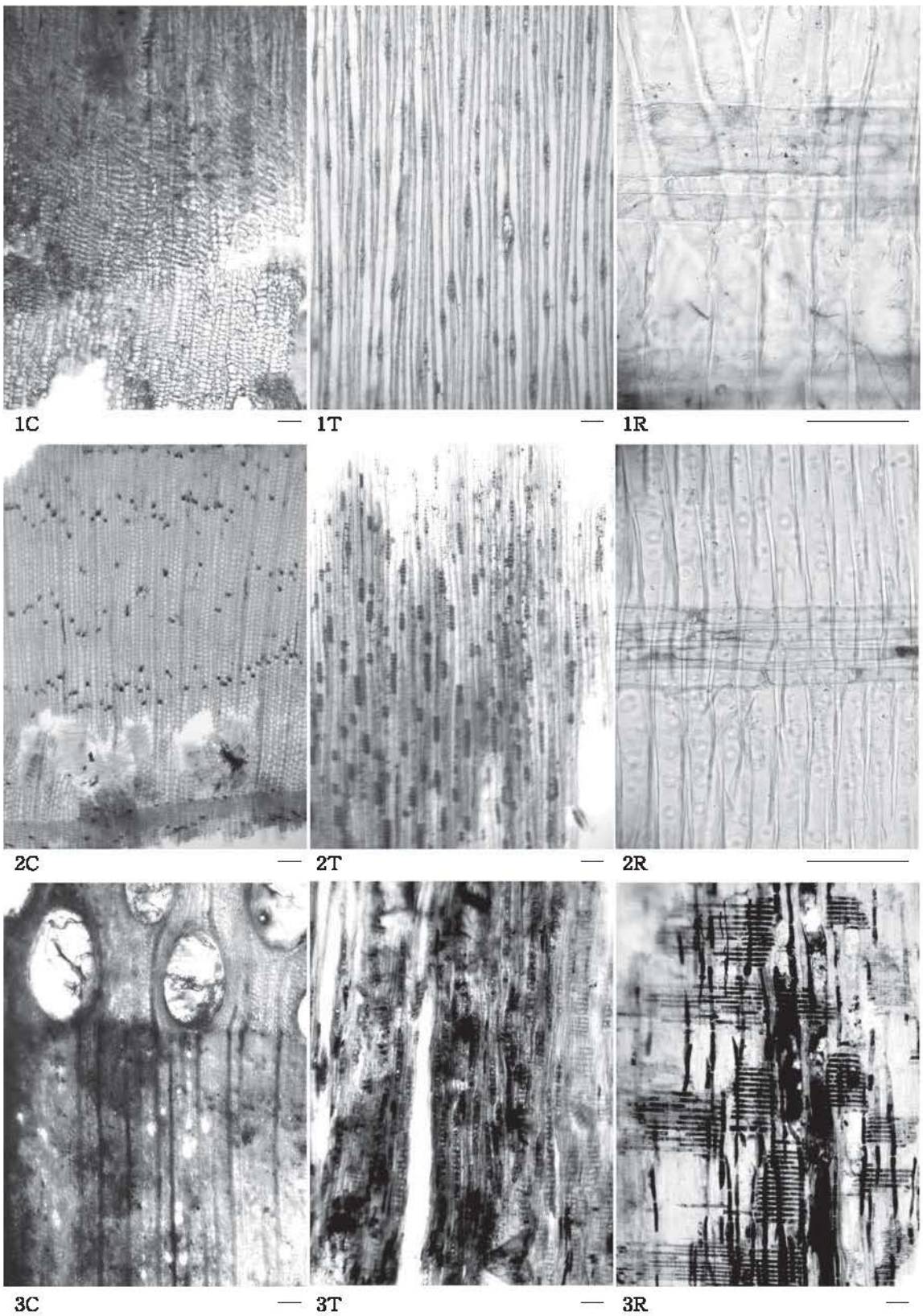
20

21

22

図版8　第20地点　出土遺物(2)





図版1 新発田城跡第20地点出土加工材の顕微鏡写真
1.アカマツ（No.5、杭）2.スギ（No.6、杭？）3.クリ（No.10、柱根）
C:横断面、T:接線断面、R:放射断面、スケールは0.1mm

報　告　書　抄　録

ふりがな	しばたじょうあと　はっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	新発田城跡　発掘調査報告書Ⅵ
副書名	（第20地点）
シリーズ名	新発田市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第39
編著者名	渡邊美穂子・吉川純子
編集機関	新発田市教育委員会（教育部　生涯学習課　埋蔵文化財係）
所　在　地	〒959-2323　新潟県新発田市乙次281番地２　　TEL　0254-22-9534
発行年月日	平成21（2009）年3月18日
体　　裁	Ａ４判　横組１段　本文30頁　写真図版９頁

所収遺跡	所在地	市町村コード	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
しばたじょう 新発田城跡	新発田市大手町6丁目4番16	15206	37°57′21″	139°19′20″	20070820～0926 20080520～0602	216㎡	自衛隊駐屯地施設建設工事

遺跡の種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	古代・中世	土坑１基（古代）	土師器甕，須恵器杯，瀬戸・美濃，珠洲焼，越前焼	
近世城郭	江戸時代	掘立柱建物1棟，ピット列２列，土坑５基，溝３条，ピット87基	19世紀を主体とする近世陶磁器(肥前陶磁器，瀬戸・美濃陶器，京都・信楽陶器，越前陶器，萩陶器，堺陶器，産地不明の陶磁器類)，瓦質土器，黒瓦，銭貨，柱根・加工木材等	

要　　約

今回調査地点は，新発田城二ノ丸西側城外，西ノ門前にあたる。江戸時代の初期には侍町の一角であったが，19世紀代には新発田藩の公的施設である「御作事所」が設置されており，幕末まで機能していた場所である。近代以降の土地利用による攪乱が著しかったが，東半調査区では，遺物包含層は薄いながら３面の遺構検出面があり，近世のピット多数等を検出し，19世紀代の掘立柱建物１棟・ピット列２列を確認した。これらの構築物は主軸方位が御作事所の区画と一致することから，これに関係するものと考えられる。調査範囲は狭小であり，これらの遺構は調査区外に広がる可能性を持つ。

新発田城跡 発掘調査報告書Ⅵ
（第20地点）

発　行　　平成21(2009)年3月18日
新発田市教育委員会
新潟県新発田市乙次281番地２　(0254-22-9534)
印　刷　　株式会社　エンジュ